長崎県文化財調査報告書　第172集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅵ

2003

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第172集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅵ

・オテカタ遺跡（厳原町）
・水崎（仮宿）遺跡（美津島町）

2003

長崎県教育委員会

発刊にあたって

長崎県には，約3,800箇所の遺跡があることが知られています。これらの中には，対馬の金田城跡や壱岐の原の辻遺跡といった国指定特別史跡をはじめ，本県の歴史文化を解明する上で欠かせない遺跡が数多く含まれています。

県では，そのうち155遺跡を主要遺跡と定め，学術的な価値や今後の保存・活用のための基礎資料を得るために，平成8年度から内容確認調査を実施してまいりました。

本書は，平成13年度に実施した厳原町のオテカタ遺跡と美津島町の水崎(仮宿)遺跡の調査報告書です。両遺跡については，それぞれ弥生時代と中世の集落遺跡と認識されながら，その内容解明は手つかずのままでした。今回の調査で，従来の資料に新たな知見が加わり，より詳細に遺跡の性格をうかがい知ることができました。このような調査成果の積み重ねが，本県の歴史を正しく認識するための一助となっていくものと思います。

最後に，本書が県民の埋蔵文化財に対する理解と愛護に繋がり，学術文化や文化財保護のために広く活用されることを祈念するとともに，発掘調査の実施に際してご協力をいただきました地元関係者ならびに教育委員会の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成15年3月31日

長崎県教育委員会教育長

木　村　道　夫

例　　言

1　本書は長崎県教育委員会が平成８年度から実施している
県内主要遺跡内容確認調査の結果報告である。

2　本書には平成13年度に調査を行ったオテカタ遺跡（厳原町）
水崎（仮宿）遺跡（美津島町）の結果報告を収録した。

3　本書では各遺跡について分担執筆した。それぞれの遺跡に
ついての執筆者は以下のとおりである。

オテカタ遺跡	本田秀樹
水崎（仮宿）遺跡	川口洋平

4　詳細は各項の例言を参照されたい。

5　本書の総括編集は本田が行った。

総　目　次

第Ⅰ部　オテカタ遺跡(厳原町)

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境 …… 4

第２節　歴史的環境 …… 4

第２章　オテカタ遺跡の調査履歴 …… 6

第３章　調　査

第１節　調査概要 …… 7

第２節　層位 …… 8

第３節　調査区概要 …… 11

第４節　出土遺物 …… 18

第４章　まとめ …… 21

第Ⅱ部　水崎(仮宿)遺跡(美津島町)

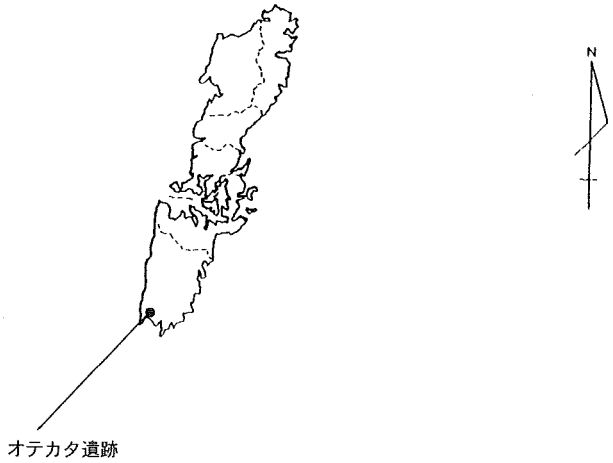
第１章　地理的・歴史的環境 …… 36

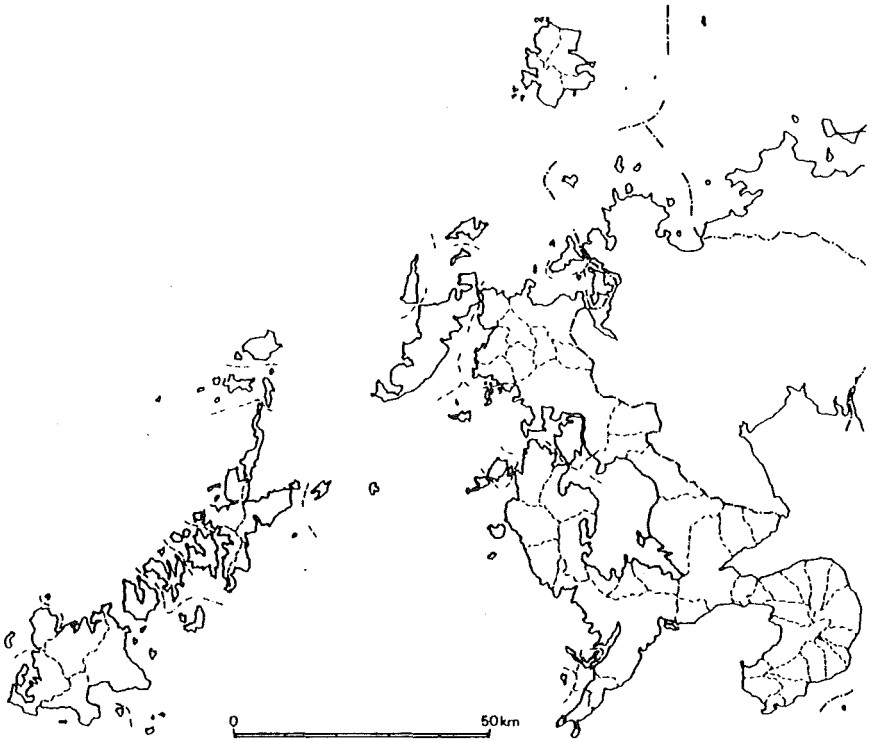
第２章　調査の経緯 …… 37

第３章　調査内容 …… 38

第４章　総括 …… 44

第Ⅰ部　オテカタ遺跡





例　　言

1　本書は長崎県下県郡厳原町大字豆酘字東保床に所在するオテカタ遺跡の調査報告書である。

2　調査は長崎県教育庁学芸文化課が事業主体となり，厳原町教育委員会の協力を得て，平成13年9月10日から同年9月28日にかけて実施した。

3　調査関係者は次のとおりである。

調査担当	長崎県教育庁学芸文化課	文化財保護主事	本田秀樹
		文化財調査員	竹中哲朗
調査協力	厳原町教育委員会	副参事兼文化財係長	小磯嘉文
		主事	尾上博一

4　遺物実測およびトレースについては本多和典・小林利恵子・近藤慶子・佐藤いづみ・松尾美代子・渡辺洋子の協力を得た。

5　本篇における遺物・写真・図面等は長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。

6　本篇の執筆・編集は本田が行った。

本　文　目　次

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境 …… 4

第２節　歴史的環境 …… 4

第２章　オテカタ遺跡の調査履歴 …… 6

第３章　調　査

第１節　調査概要 …… 7

第２節　層位 …… 8

第３節　調査区概要 …… 11

第４節　出土遺物 …… 18

第４章　まとめ …… 21

挿　図　目　次

遺跡位置図 …… 1
第１図　オテカタ遺跡周辺の遺跡 …… 5
第２図　遠方壇出土石製把頭飾 …… 6
第３図　オテカタ遺跡出土無文土器 …… 6
第４図　調査区周辺地形図 …… 7
第５図　試掘坑配置図①（１/１,000） …… 8
第６図　試掘坑配置図②（１/１,000） …… 9・10
第７図　５Ｔ・６Ｔ土層図（１/40） …… 11
第８図　７Ｔ検出遺構及び土層図（１/40） …… 12
第９図　１Ｔ・２Ｔ・３Ｔ・４Ｔ土層図（１/40） …… 13・14
第10図　９Ｔ検出遺構及び土層図（１/40） …… 15
第11図　11Ｔ検出遺構及び土層図（１/40） …… 16
第12図　８Ｔ・12Ｔ土層図（１/40） …… 17
第13図　オテカタ遺跡出土遺物①（１/３） …… 18
第14図　オテカタ遺跡出土遺物②（１/３） …… 19
第15図　オテカタ遺跡出土遺物③（１/８） …… 20
第16図　オテカタ遺跡範囲推定図 …… 22

表　目　次

第１表　厳原町豆酘周辺の遺跡一覧 …… 4

図　版　目　次

図版１　豆酘遠景，保床山丘陵から天神神社を望む，調査風景 …… 25
図版２　３Ｔ西壁，４Ｔ東壁，５Ｔ・６Ｔ …… 26
図版３　７Ｔ北壁，７Ｔ検出遺構，７Ｔ遺物出土状況 …… 27
図版４　９Ｔ検出遺構①，９Ｔ検出遺構②，９Ｔ遺物出土状況 …… 28
図版５　旧豆酘小学校跡地，11Ｔ北壁，11Ｔ遺物出土状況 …… 29
図版６　出土遺物① …… 30
図版７　出土遺物② …… 31

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

オテカタ遺跡の所在する厳原町は長崎県の最北端・対馬にある。国境の島として知られる対馬は南北約 82km，東西約 18kmの細長い島で，厳原町はその最南端に位置する。古代より政治文化の中枢として発達し，どちらかといえば日本本土に向いた海の玄関口としての役割を担ってきた。

対馬は全島の 89%が山林で，標高 200 ～ 300m の山々が海岸まで迫る。特に厳原町は峻険な山が重なり，島の最高峰・矢立山(標高 648.5m)をはじめ，国天然記念物の原始林を残す竜良山がある。

河川もこれら深く険しい山々に源を発するため急流が多い。分水嶺は東に偏っており，比較的傾斜が緩やかな西海岸の河川流域が数少ない可耕地となっている。ただし，耕地率は 3.0%と本県離島の中では最低である。対照的に，面積では５分の１しかない壱岐が，対馬の 2.8 倍の耕地を有している。

集落は海岸沿いに形成された僅かな平地に点在し，人口 300 人以下の小規模集落が大半を占める。対馬の農地は地力が弱いといわれ，農業の就業人口は少ない。「無良田，食海物自治，条船南北市糴」という『魏志』倭人伝の記載は的確である。本遺跡がある豆酘は対馬でも最南端に位置する。ここは木槲山に源を発する神田川が南流してできた平野が広がり，耕地の乏しい対馬にあっては数少ない穀倉地帯である。遺跡は神田川の右岸，保床山丘陵の南東斜面に立地し，標高は 36m 前後を測る。

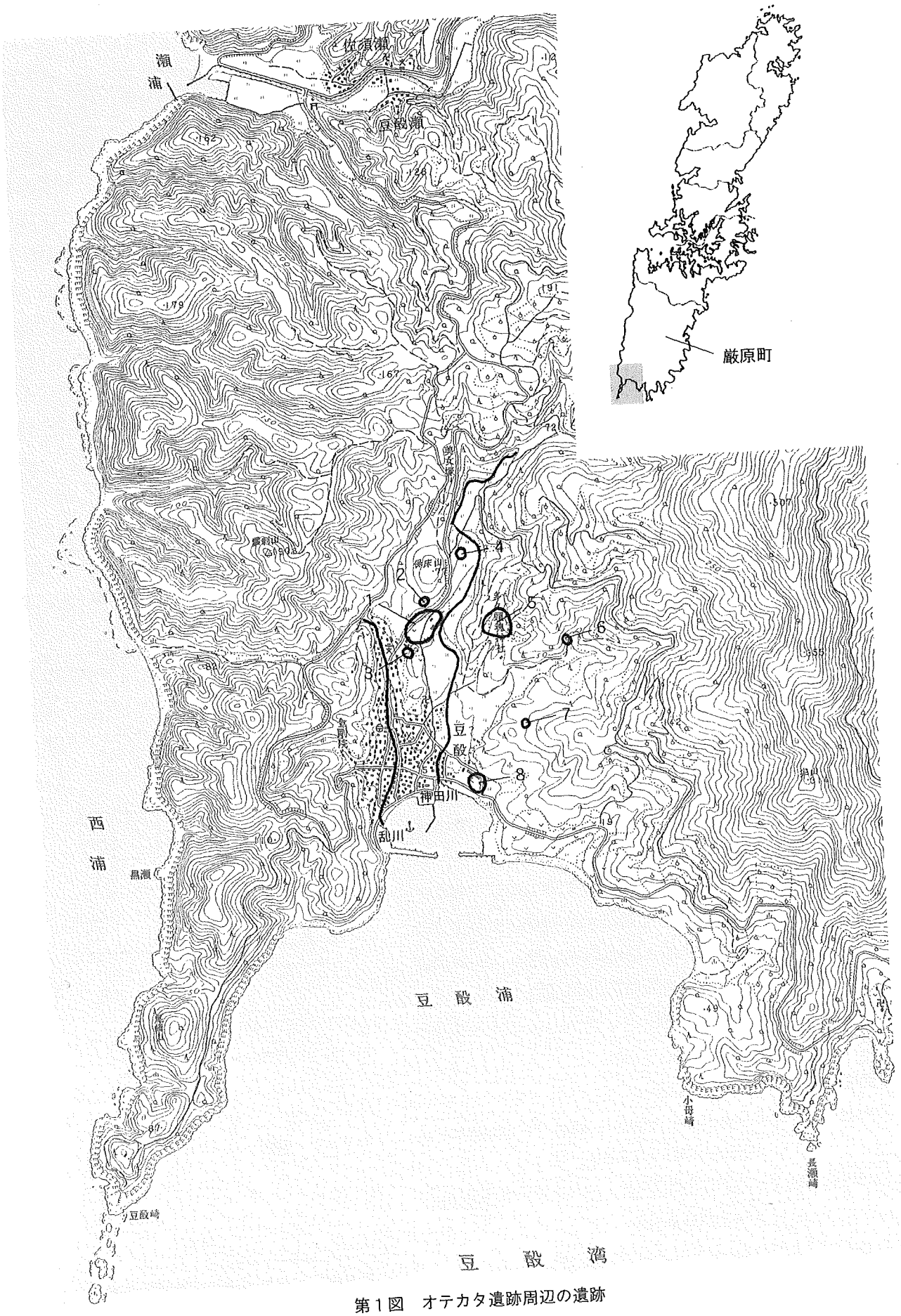
第２節　歴史的環境(第１・２図，第１表)

豆酘は対馬にあっても，古い歴史や慣習を残す特異な集落である。雷神社の亀卜神事や多久頭魂神社の赤米神田，頭受け神事は有名で，国指定の文化財が集中する宝庫といえるだろう。ただし，遺跡の数は目立って多いとはいえない。これはおそらく古代～中世の集落や生活の在り方が現在まで継承されていることの証と考えられる。

過去に調査がなされたのはオテカタ遺跡(１)，豆酘保床山古墳(２)，馬乗石古墳(４)，樫ぼの遺跡(６)があり，詳細はそれぞれの報告書に譲るが，ここでは遠方壇遺跡(７)について紹介したい。この遺跡は多久頭魂神社近くの山林を開いたときに石製把頭飾(第２図)が出土したことで知られる。出土状況等は不明ながら，本県では４例(対馬では２例)あるうちの一つに数えられる。形態的には田平町里田原遺跡出土のものと酷似する。朝鮮系無文土器または擬無文土器の分布と同じ傾向を見せるという指摘もあり(片岡 1988)，無文土器が出土したオテカタ遺跡との関連を探るために取り上げた。

番号	遺跡名	所在地	種別	立地	時代	備考
1	オテカタ遺跡	厳原町豆酘字ヲテカタ	遺物包含地	丘陵	弥生・古墳	
2	豆酘保床山古墳	厳原町豆酘字東保床	古墳	丘陵	古墳	
3	保床山遺跡C	厳原町豆酘字ヲテカタ	遺物包含地	丘陵	古墳	
4	馬乗石古墳	厳原町豆酘字字馬乗石	古墳	丘陵	古墳	
5	多久頭魂神社遺跡	厳原町豆酘字寺門	埋納地	丘陵	中世	銅鏡5面
6	樫ぼの遺跡	厳原町豆酘字寺門	生産遺跡	川縁	近世	県指定有形民俗文化財
7	遠方壇遺跡	厳原町豆酘字遠方壇	不明	丘陵	弥生	石製把頭飾
8	豆酘中学校遺跡	厳原町豆酘字東神田	墳墓	丘陵	古墳	石棺数基

第１表　厳原町豆酘周辺の遺跡一覧



第1図　オテカタ遺跡周辺の遺跡

参考文献

近藤喬一 2000　「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史』資料編　考古１　山口県

徳永貞紹 1994　「弥生時代の石製把頭飾」『先史学・考古学論究』龍田考古会

片岡宏二 1988　「弥生時代の遺構と遺物」『横隈北田遺跡』小郡市文化財調査報告書第 48 集　小郡市教育委員会

第２章　オテカタ遺跡の調査履歴

遺跡の存在が知られるようになったのは，昭和 50(1975) 年に倭人伝研究会による「邪馬台国の道」探求の事前調査を契機とする。当地を訪れた下條信行や尹容鎮，東潮らは，標高 40m の丘陵上で，土取りによってできた崖面とその崩落土の中から土器片を採集した。

翌昭和 51(1976) 年には本格的な発掘調査が九州大学考古学研究室によって行われた。露出した崖面で確認された溝状の窪みを遺物包含層と解釈し，調査は溝と直行する方向に 15m × 1.5m のトレンチを設けて実施された。その結果，溝は自然にできた溝谷であるものの，その中に遺物包含層が存在することが確かめられた。

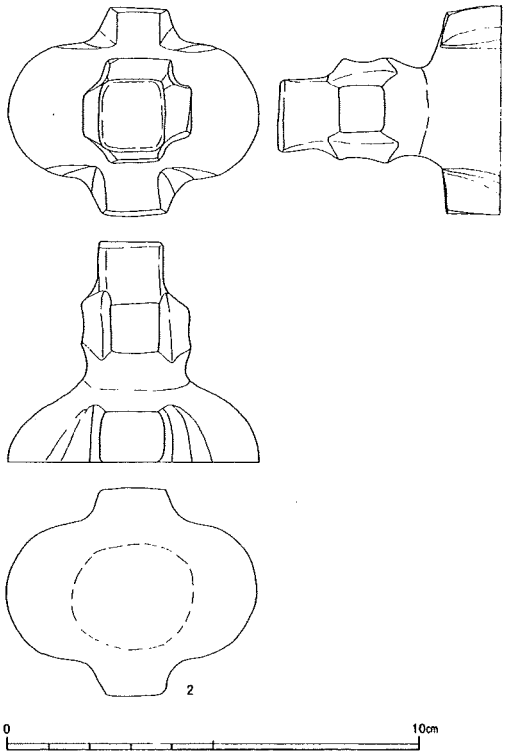
土層は４層に大別され，第Ⅲ・第Ⅳ層が弥生中～後期の包含層であるという。無文土器は第Ⅲ層から５点出土している (第３図)。いずれも口縁部に貼り付けられた粘土帯は断面三角形で，最終段階のものであった。

九州大学の調査地点を正確に特定することはできないが，標高や土取りで露出した崖面等の記載から類推すると，主要地方道厳原・豆酘・美津島線に沿った北西側丘陵である可能性が高い。長崎県教育委員会は当初，保床山Ａ・Ｂ遺跡という名称を用いていたが，後に同一遺跡と判断し「オテカタ遺跡」に統一した。

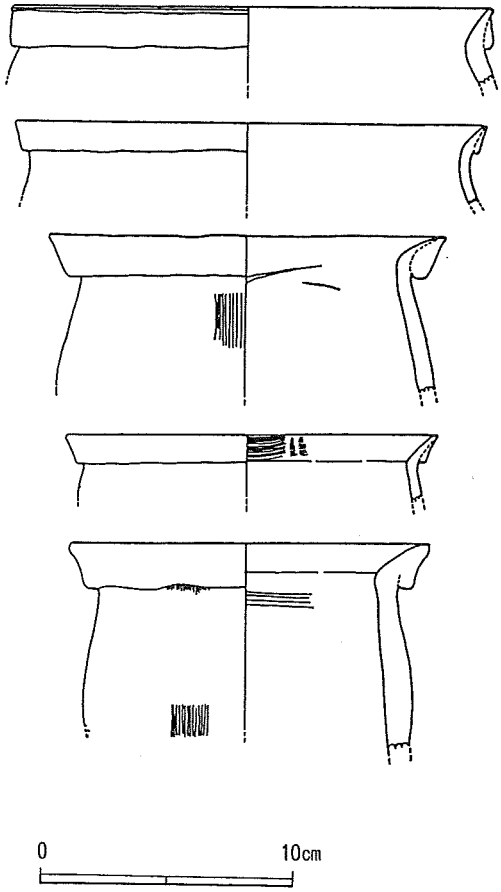
参考文献

下條信行 1991　「オテカタ遺跡」小田富士雄編『日韓交渉の考古学 (弥生時代編) －遺跡解説－』

下條信行 1996　「オテカタ遺跡」『原始・古代の長崎県』資料編Ｉ　長崎県教育委員会



第２図　遠方壇出土石製把頭飾



第３図　オテカタ遺跡出土無文土器

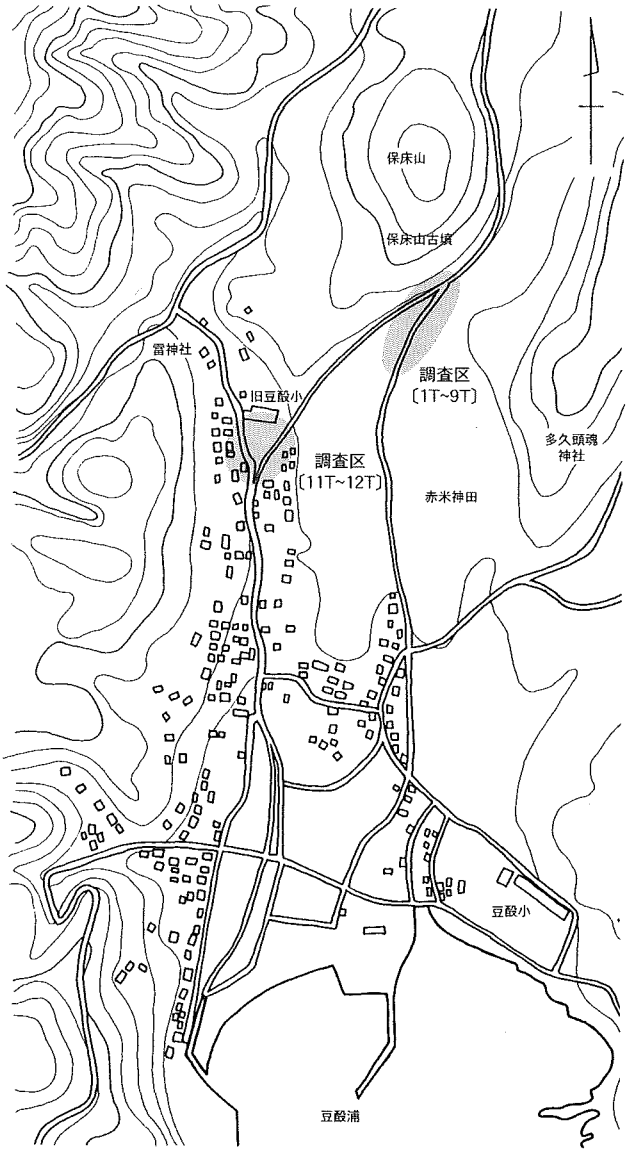
第3章　調　査

第1節　調査概要

今回の調査は平成8年度から長崎県教育委員会が行っている，県内主要遺跡内容範囲確認調査事業に基づくものである。第2章で紹介したように，オテカタ遺跡は昭和51年に九州大学が発掘調査を行い，朝鮮半島系の無文土器と弥生土器が共伴して出土したことで周知されることとなった。過去にも，幼稚園建設の際に磨製石剣の出土が伝えられ，弥生～古墳時代の集落跡が存在する有力候補地に挙げられている。ただし，これまで遺構等は見つかっておらず，今回の発掘調査も遺跡の内容と範囲を明確にすることを目的とした。

遺跡が所在する豆酘は対馬の最南端に位置する。ここは木槲山に源を発する神田川が南流してできた平野が広がり，耕地の乏しい対馬にあっては数少ない穀倉地帯となっている。オテカタ遺跡は神田川の右岸，保床山丘陵の南東斜面に立地し，標高は36m前後である。(第4図)

調査は平成13年9月10日から9月28日までの18日間実施した。調査面積は122m²で，試掘坑(以下，Tと記す)をオテカタ遺跡内とその周辺に9箇所(1T～9T)，旧豆酘小学校グラウンドに2箇所(11T・12T)の計11箇所を設けて実施した。観音堂(豆酘寺)跡隣接地にも試掘坑(10T)を設けたが，諸般の事情で埋め戻し，調査は行っていない。(第5図・第6図)



第4図　調査区周辺地形図

調査の結果，1Tと2T，5Tと6Tの丘陵斜面では遺構・遺物とも確認できず，それ以外は全てにおいて遺物包含層若しくは何らかの遺構を確認することができた。各調査区の概要と出土遺物については，第3節以降に詳述するが，7Tと8Tではそれぞれ径40～50cmのピットが1基見つかった。9Tは住居跡と思われる一辺を検出し，床面直上から弥生中期の甕が出土した。これと切り合う時期不明の土坑もあり，複数の時代にわたって遺跡が営まれていたことも判明した。また，旧豆酘小学校グラウンドでも弥生後期の大型壺形土器が出土し，オテカタ遺跡とは別の遺跡が存在することわかった。

なお，オテカタ遺跡の範囲は多久頭魂神社の神田域にあたり，赤米等が作付けされている水田が大半を占めるため，適切な場所に調査坑を設けることができず苦労した。しかしながら，厳原町教育委員会をはじめ，地元の方々のご協力を得て調査を実施することができた。

第２節　層位

土層は基本的に４つに大別できる。第１層は表土で，第２層は硬質の黄褐色土層，第３層は黒褐色粘質土層，第４層は明黄褐色粘質土層である。このうち第３層が遺物包含層で，弥生時代～中世までの遺物が出土した。遺構は第４層上面で確認することができる。

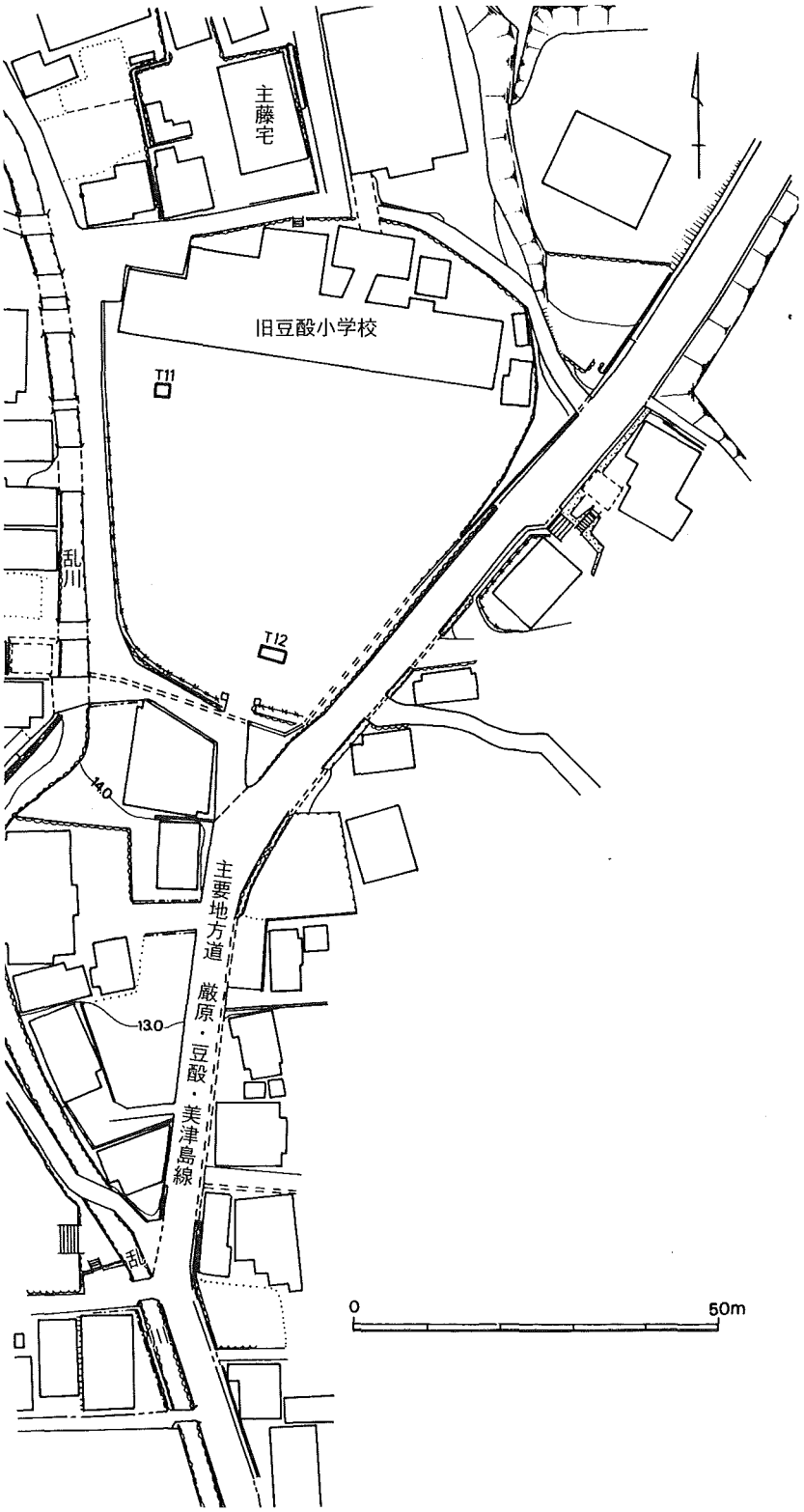
第２層は非常に緻密な硬い層で，掘削にはかなり時間を要した。黄褐色土を基調とし，１cm大の赤褐色ブロックや円礫を含む。出土遺物は古代から近世までと幅広く，小片で摩滅が著しい。九州大学の調査では第Ⅱ層は弥生土器・土師器・須恵器を含む撹乱層とされ，これと同一層と考えられる。

第３層は黒褐色土を基調とし，炭化物粒や黄褐色ブロックが混在する。粘性は強く，第２層ほどではないが硬質である。遺物は主に古墳時代から古代のものが含まれる。

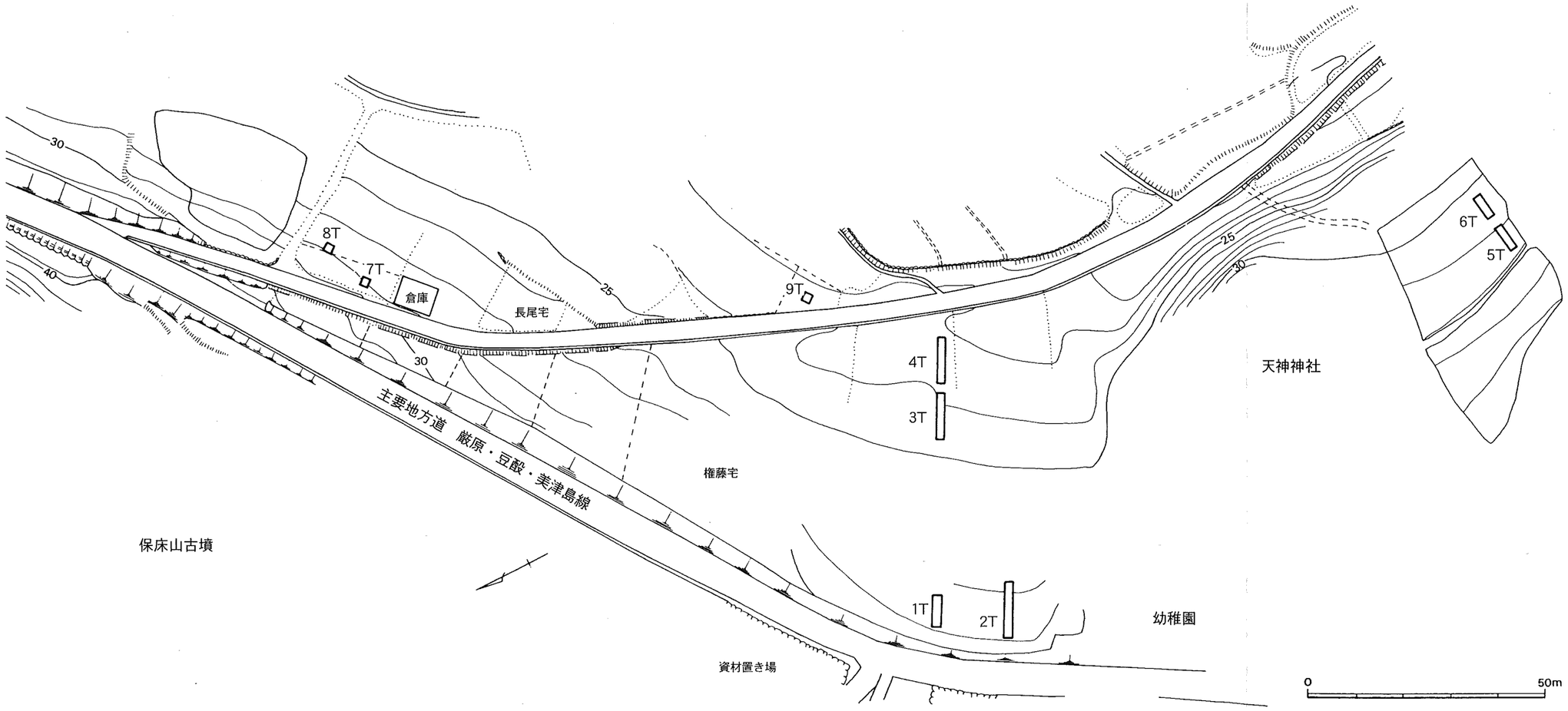
第４層は粘性の強い明黄褐色土を基調とする。遺物の出土はなく，遺構はこの層の上面で確認できる。

九州大学の第Ⅲ・第Ⅳ層は弥生中期～後期の包含層という認識であるが，土色についての記載はなく，同一層か否か判断できない。今回の調査では第３層中に遺物の出土はあったが，第４層からはなく，「溝の中央部分にのみ確認された」との記載に従えば，局所的な堆積層かと思われる。

なお，旧豆酘小学校跡に設けた調査区はオテカタ遺跡の土層とは基本的に異なることから，第３節で改めて記述したい。



第５図　試掘坑配置図①（1/1,000）



第６図　試掘坑配置図②(1 / 1,000)

第３節　調査区概要

今回の調査で明らかに遺構と断定できるものが確認されたのは，７Ｔ・８Ｔ・９Ｔである。12Ｔは遺構の形状や範囲を特定できないため，ここでは不明遺構として取り扱った。

以下，各調査区の状況について記していくことにする。

１Ｔ・２Ｔ(第９図)

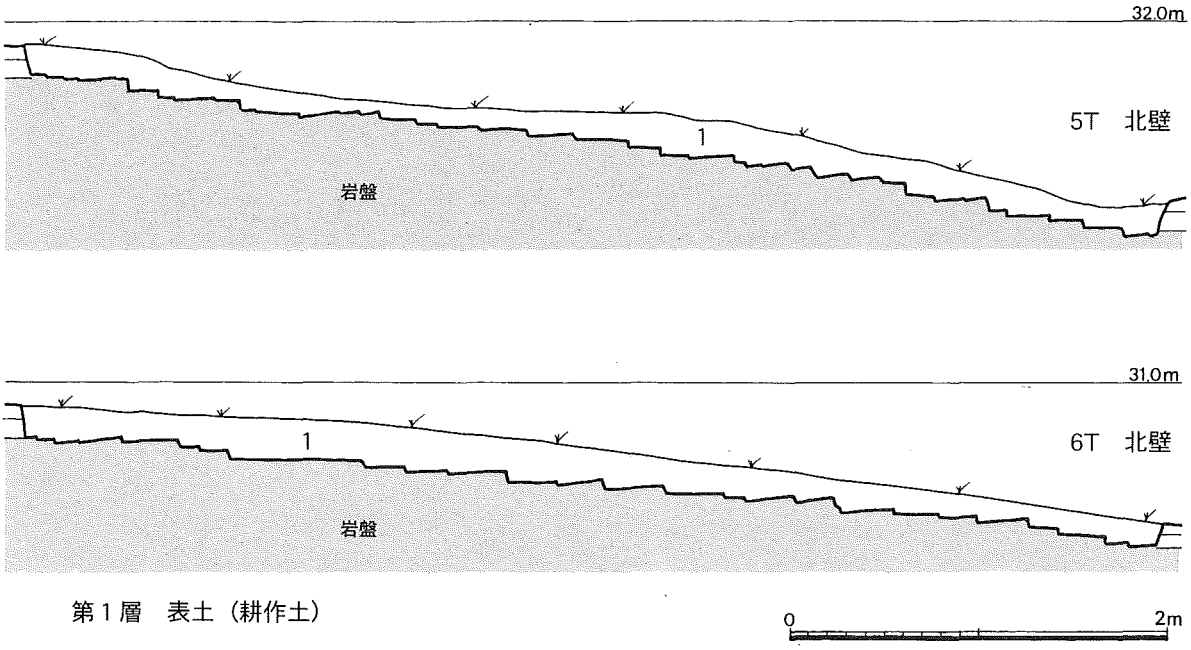
１Ｔ・２Ｔは保床山丘陵の南東側，主要地方道厳原・豆酘・美津島線に南隣する斜面に設けた調査坑である。標高は28～30mを測る。道路や等高線と直交するように２箇所設け，北側を１Ｔ，南側を２Ｔとした。調査前は雑草が繁茂する状態で，畑地としてはほとんど利用されていない。

１Ｔは７ｍ×1.5mの範囲に設定した試掘坑である。表土から10cmほど下で第２層の黄褐色土層となる。この層はツルハシ等を使用しなければ掘削できないくらい，非常に硬く締まっていた。そのためトレンチ全体の掘り下げを断念し，西側２ｍ部分だけに調査を絞った。第２層はやがて角礫を多く含むようになり，１ｍほどで岩盤に達した。遺物は表土から須恵器や陶質土器，雑釉陶器等の小破片が出土したにすぎない。

２Ｔも１Ｔと基本的に同様である。12m×1.5mの範囲で調査を開始したが，第２層のあまりの硬さに調査を限定せざるを得なかった。ここでも西側２ｍ部分だけを掘り下げ，土層の状態を確認するにとどまる。層序は１Ｔと同じで，70cmくらいで岩盤に達した。遺物は表土から輸入陶磁器が数点出土しただけである。１Ｔ・２Ｔは丘陵斜面であるため，他の調査区で見られるような遺物包含層の堆積はなかったと考えられる。

３Ｔ・４Ｔ(第９図，図版２)

３Ｔ・４Ｔは１Ｔの東側延長線上，比高差で約３ｍ下の畑地にある。西から順に３Ｔ，４Ｔとし，それぞれ10m×1.5mの範囲を調査区として設定した。標高は23～25m前後で，保床山丘陵の裾部にあたる。東側にある道路付近が傾斜変換点で，丘陵部と平野部の境界はこのあたりとなる。道路は幅３～４ｍほどで，北上して主要地方道厳原・豆酘・美津島線に合流する。本来はこれが豆酘集落に至



第７図　５Ｔ・６Ｔ土層図（1/40）

る主要道と考えられる。道路を挟んで東側は水田で，多久頭魂神社の神田域であったとされ，今なお赤米を作付けする田も残っている。

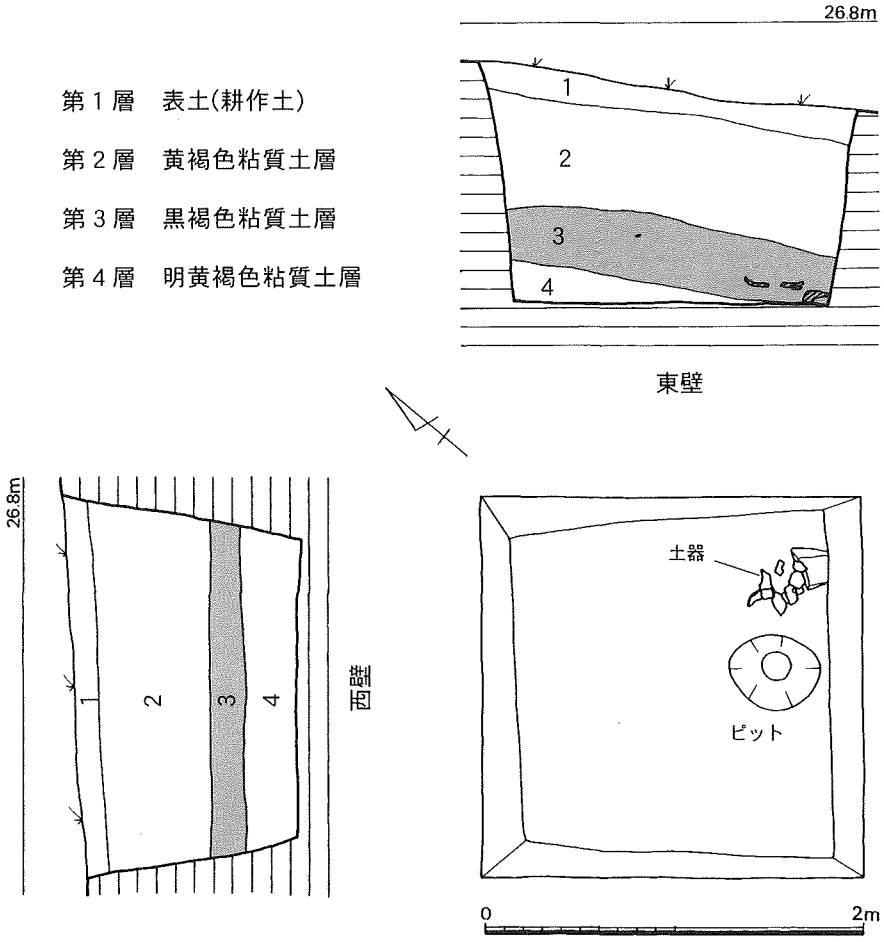
調査当初，３Ｔの土層堆積は１Ｔや２Ｔと同じ様な状況が窺えたため，こちらも西側だけを部分的に掘り下げる方法をとった。その後，第２層の下には対州層群の岩盤が現れると想定していたところ，黒褐色粘質土層へと移行し，遺物がまとまって出土する包含層であることがわかった。

包含層の厚さは30～40cmで，古墳時代の土師器・須恵器を主体とする。第２層は輸入陶磁器類も含まれていたが，第３層には少なく，時期的にほぼ限定できるという見通しをもった。

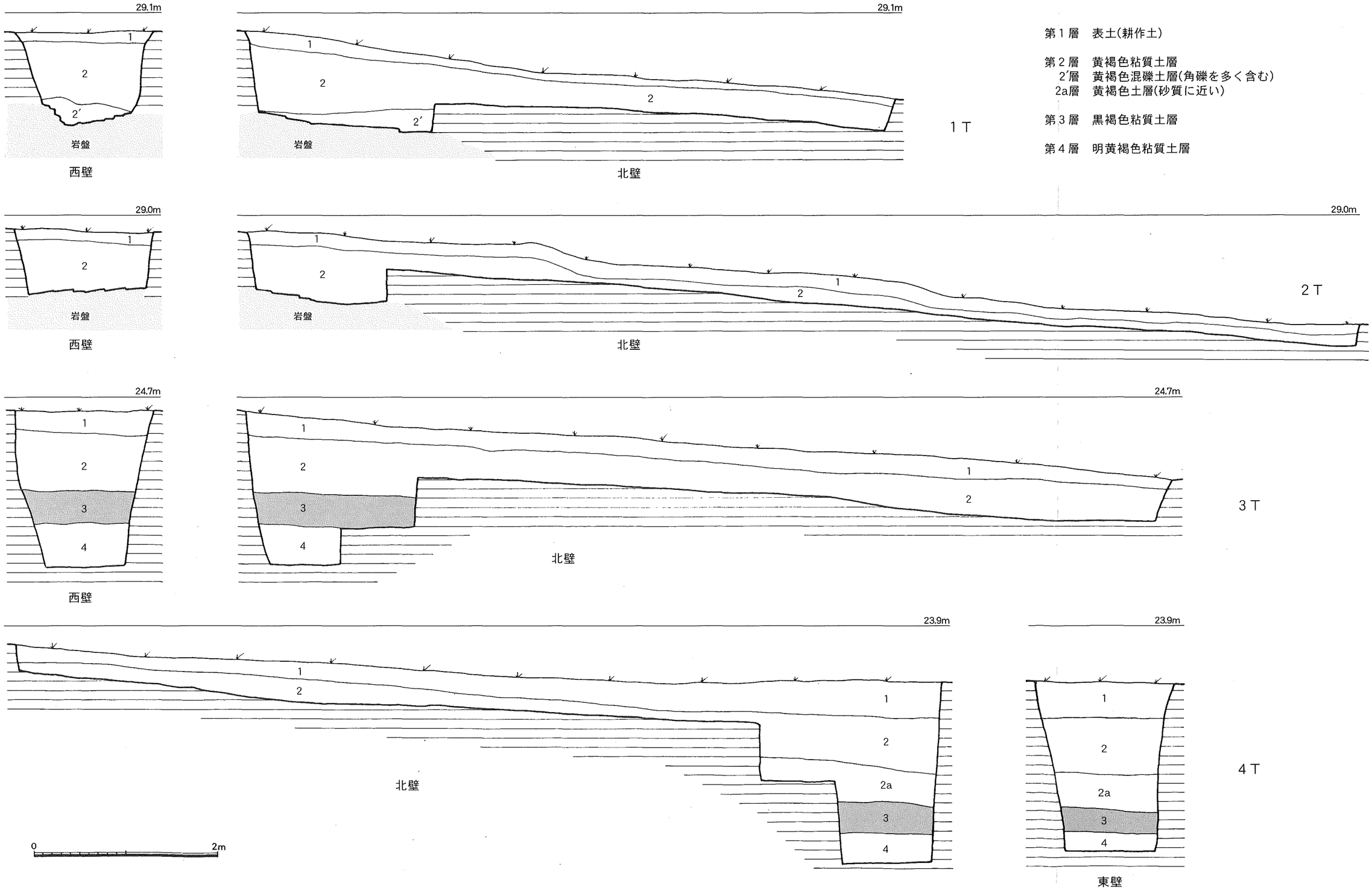
第３層の下には保床山に浸透した雨水が流れ込む水脈があるようで，多久頭魂神社の神田地下にもゆきわたるのであろう。第４層の明黄褐色粘質土層上面は冠水状態となり，遺構等を検出するための精査はできなかった。

４Ｔは３Ｔと状況はほぼ同じで，第２層以下の土層堆積を見るために，東側２ｍを部分的に掘り下げた。第２層は下層へいくに従って硬さが失せ，砂質となる。その後，第３層で黒褐色粘質土層の遺物包含層を確認した。第３層の堆積は20～30cmで，３Ｔより厚みを減じる。遺物は５～６世紀代の土師器や須恵器が中心で，炭化物が付着した甕もある。第２層・第３層ともに遺物は角が取れており，ローリングを受けているようで，二次堆積の可能性がある。

なお，３Ｔの第３層下層で見られた地下水の浸み出しは，４Ｔでは第４層内でうかがえた。第４層上面での遺構検出は可能な状態にあったが，調査範囲は狭小で何も確認できなかった。



第８図　７Ｔ検出遺構及び土層図（1/40）



第９図　１Ｔ・２Ｔ・３Ｔ・４Ｔ土層図(１/40)

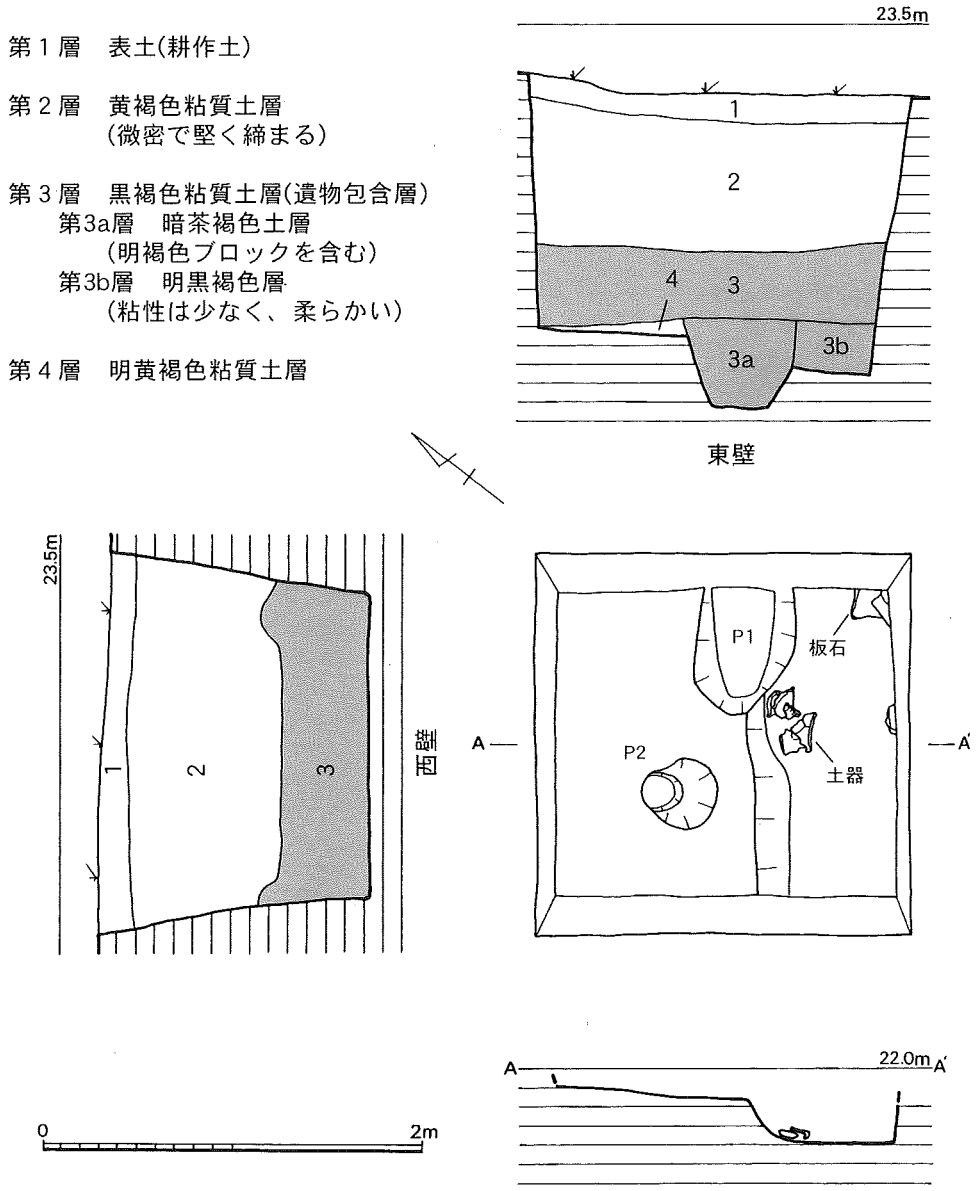
５Ｔ・６Ｔ(第７図，図版２)

５Ｔ・６Ｔは天神神社の鎮座する独立丘陵の南東斜面に設定した。天神神社は丘陵頂部に小さな祠を備えただけの素朴な神社である。北西側に隣接する幼稚園建設の際には磨製石剣が出土したと伝えられることから，当該地を調査区に選定した。現況は畑地で，標高は 30 ～ 32m を測る。それぞれ６ｍ × 1.5m のトレンチを斜面の傾斜に沿って配置し，標高の高い方から順に５Ｔ，６Ｔとした。

基本的な状況は１Ｔや２Ｔに近い。ともに表土である耕作土の下は対州層の岩盤で，第２層以下を完全に欠失する。封土が流失した可能性もなくはないが，傾斜はさほど急でない。何らかの掘削等を受けたとしても第３～４層まで及んだとは考えにくく，元々堆積層は存在しなかったのではないだろうか。遺物は試掘坑はもとより，周囲からも採集されなかった。

７Ｔ(第８図，図版３)・**８Ｔ**(第 12 図)

７Ｔ・８Ｔは，３Ｔ・４Ｔの東側にある道路が北進して主要地方道厳原・豆酘・美津島線と合流する付近の南斜面に位置する。標高は 27 ～ 29m で，丘陵下位から裾部にかけての傾斜地である。斜面に



第 10 図　９Ｔ検出遺構及び土層図（1 / 40）

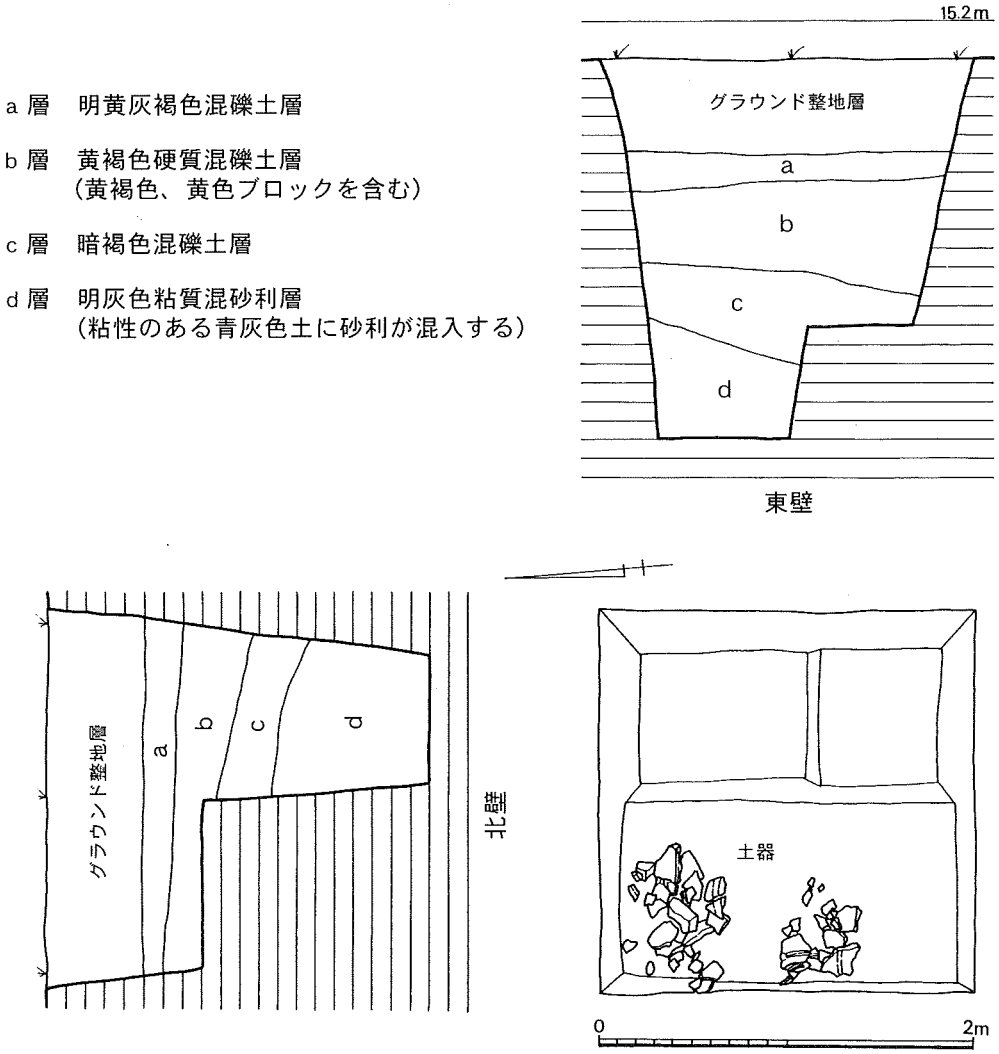
沿って20～30mも降りると神田川となり，豆酘の平野で最も奥まった地域にあたる。西側を７Ｔ，東側を８Ｔとし，ともに２ｍ四方の試掘坑を設けて調査を実施した。

７Ｔは３Ｔ・４Ｔと同じ土層堆積状況をみせる。ただし，第３層の土質は粘性が弱く，粒子は粗い。ブロック状の塊が多い点も若干異なっている。この下層では土師器甕がつぶれた状態で出土した。周囲を精査すると，南隣で径40～50cmのピット１基が検出された。ピットは第４層に堀込まれており，残存する深さは約30cmである。７Ｔからは須恵器が多く出土しており，北側約80mの斜面上方にある保床山古墳との関連が窺える。

８Ｔの第３層も粘性は低く，第２層に似て硬質気味である。掘削中は遺構の存在を確認できなかったが，北壁土層で第４層にピット１基が堀込まれていることが判明した。ピットは径50cmほどに復元できそうで，深さは検出面から約30cmを測る。遺物は７Ｔ同様に須恵器の出土が圧倒的に多く，鉄滓や軽石等もあった。７Ｔ・８Ｔともピット内からの遺物はなく，時期決定に問題を残すが，包含層出土の土師器や須恵器の年代を充てるのが妥当であろう。

９Ｔ(第10図，図版４)

９Ｔは３Ｔ・４Ｔと道路を隔てて北東側の畑地に設定した。保床山丘陵裾部で平地との傾斜変換点にあたり，標高は４Ｔと同じ23～24mを測る。土層でも同様の様相が想定されることから，調査は第



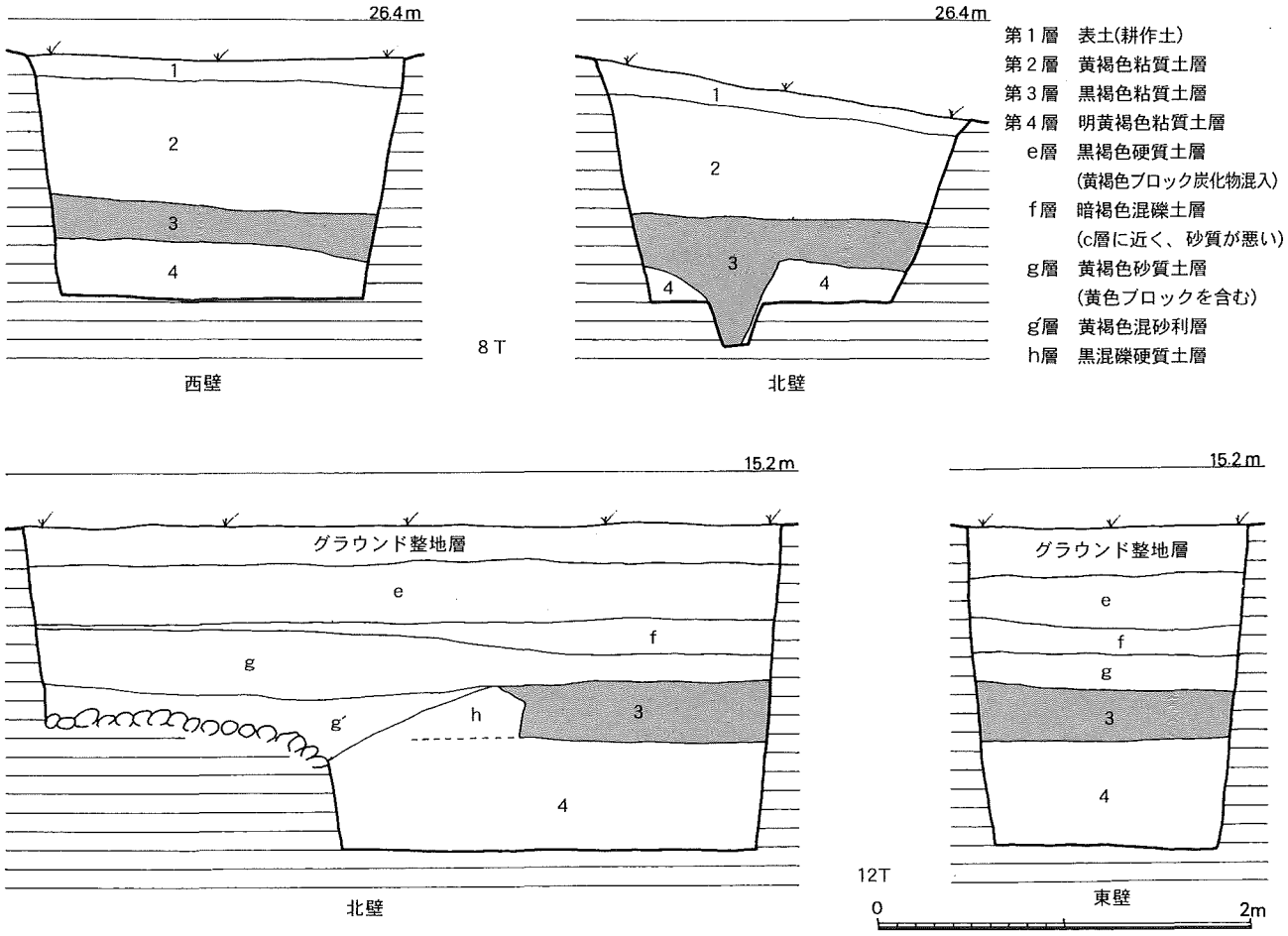
第11図　11Ｔ検出遺構及び土層図（1/40）

３層の広がりを把握することを目的とした。実際に掘り下げてみると，第３層は40cmほどの厚さで堆積しており，第４層上面ではピットと不明遺構のラインが現れた。遺構は住居跡の一部と思われ，壁面の立ち上がりは20～25cmあった。壁沿いの床面直上からは炭化物が付着した弥生中期の甕が板石とともに出土した。覆土は黒褐色土を基調としながらも，粘性は少なく柔らかい。また，住居跡を切るかたちで土坑(Ｐ１)１基も検出された。Ｐ１は径65cm×50cm，深さ45cmを測り，こちらの覆土は黒褐色土に黄色ブロックが混じるなど，住居跡とは明らかに異なる。同じ覆土は別のピット(Ｐ２)でもみられた。Ｐ２は径40cm，深さ約30cmで，土師器の口縁部片が出土している。このことから少なくとも２時期にわたる遺構が存在することが判明した。

11Ｔ(第11図，図版５)・**12Ｔ**(第12図)

オテカタ遺跡とは別地点ながら，旧豆酘小学校跡地にも２箇所のトレンチを設けた。校舎側を11Ｔ，正門側を12Ｔとする。11Ｔはこれまでの土層と異なり，学校の西隣を南流する乱川の堆積物が主体となるためアルファベットの小文字を層位に使用した。a層は古墳時代の遺物が，b層では弥生時代後期の大型壺形土器がまとまって出土した。ともに対州層の破砕礫を多量に含むことから，河川の作用による二次堆積の可能性が高い。c層以下は川砂利が主で，無遺物層となる。

12Ｔは下層にこそ第３・４層はみられるが，上層の様相は別である。土層には表れないものの，径１ｍの範囲に焼土や炭化材が混在する部分や，砂だけが径20～30cmの範囲に広がる部分もあった。限られた期間内で精査するには到底複雑すぎる内容で，今回はこれ以上の調査を見送ることにした。

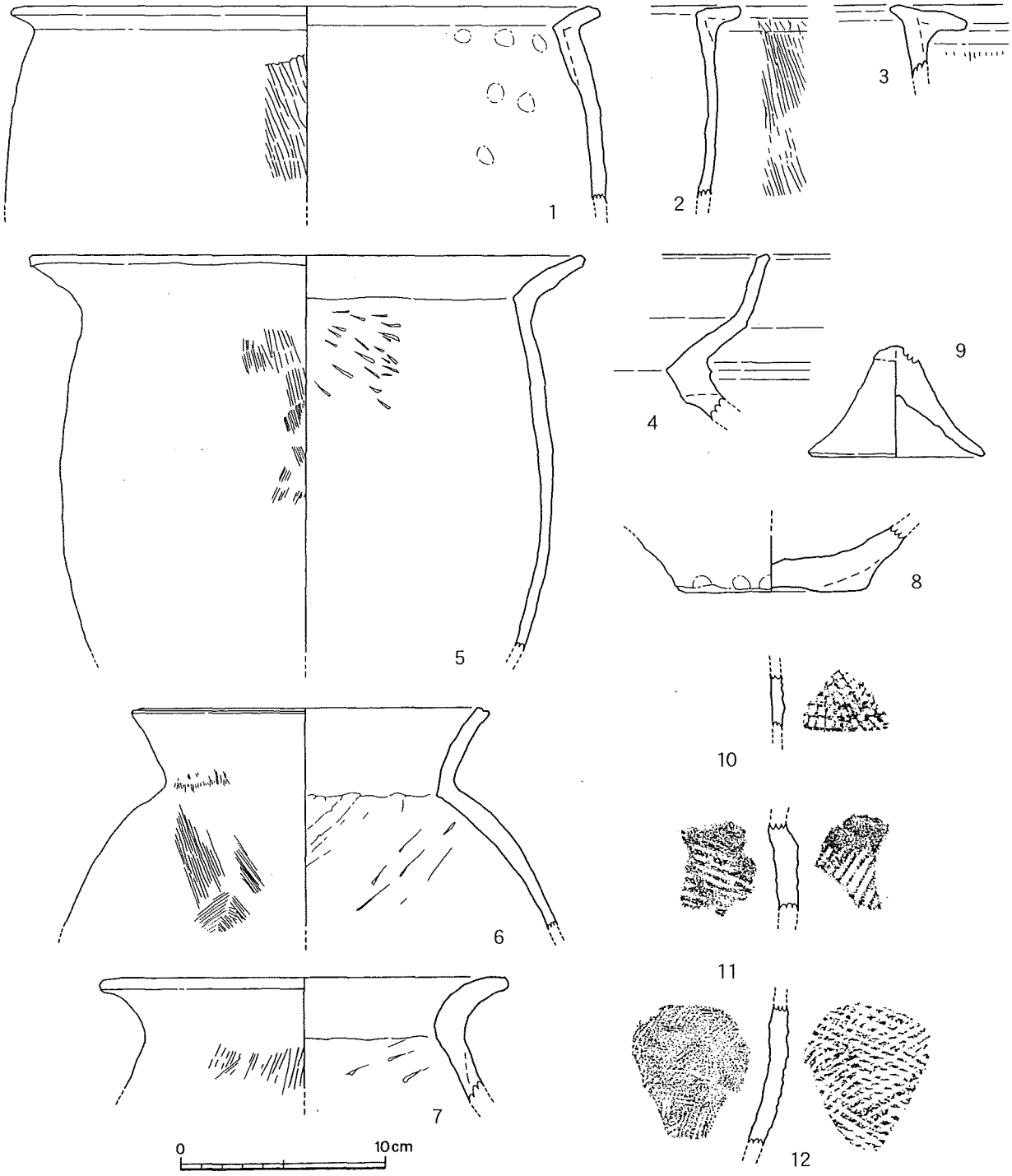


第12図　８Ｔ・12Ｔ土層図（1/40）

第４節　出土遺物(第 13 ～ 15 図，図版６・７)

遺物は全部で 917 点出土した。以下，代表的なものについて説明を加えていく。

１～４・８は弥生土器である。１は口縁部が「く」字形に短く屈曲するタイプである。胴部は口縁付近で一端すぼまり，接合部内面を肥厚させる。２は口縁部を逆Ｌ字形に屈曲させ，胴部は寸胴状になる。１・２ともに９Ｔの住居跡床面出土である。３は鍬先状口縁をした甕である。７Ｔの第３層出土。４は終末期の二重口縁である。大きく外上方に開いた口縁は，端部が内傾して面をなす。胴部との境には鈍い三角突帯を巡らす。11Ｔのａ層出土。８は弥生土器の壺の底部か。外底部中央は周囲よりくぼんでいる。９Ｔの第３層出土。

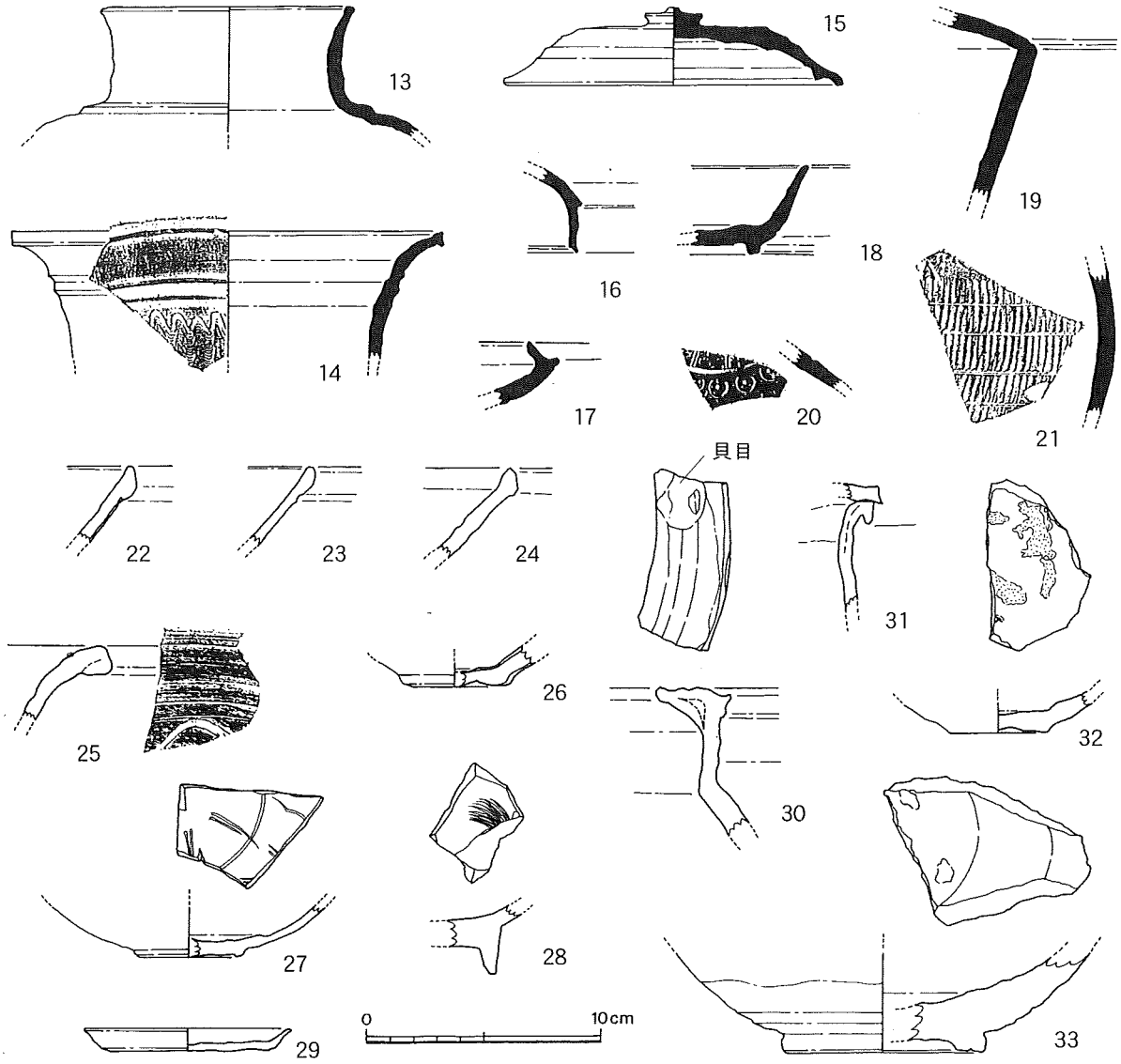


第 13 図　オテカタ遺跡出土遺物①（１/３）

5～7・9は土師器である。5は7Ｔの第３層下層からピットに隣接して出土した甕である。口縁部は外反して開き，胴部は中位付近がわずかに膨らむ。内面はヘラケズリで，口縁との接合部は水平方向に削るため稜がついている。6は上方に直線的に開く口縁部をもつ。端部は面をなし，そこには沈線を巡らす。球形に膨らむ胴部外面にはススが付着している。内面のヘラケズリは不十分で，口縁接合部の器壁は肥厚したままとなる。11Ｔのａ層出土。7は分厚い口縁部が大きく外反する。胴部は膨らみをもち，内面のヘラケズリは形だけのものになっている。９Ｔの第３層出土。9は器台か高坏の脚部と思われる。脚端部にかけて，大きくラッパ状に広がる。７Ｔの第３層出土。

10～12は玄界灘式製塩土器の胴部片である。10は外面に擬格子状のタタキ目を有する。内面はすり消されたのか，調整不明。器壁は５～６ mmと薄く，砂粒が目立つ。４Ｔの第３層上面出土。11は外面に斜位の平行タタキ，内面には横位の平行タタキを施す。口頸部は強い横ナデによって仕上げられている。器壁は１ cmほどあり，目立つ砂粒はない。９Ｔの第３層出土。12は斜位の平行タタキを密に施す。内面は細密なハケのように見えるが，平行弧線をなすタタキ目であろう。７Ｔの第３層出土。

13・14・20・21は陶質土器である。13は直口壺で，口縁部は直立したのち緩く外に開く。端部は水平に近い面をなし，内面はシャープな稜となる。胴部との境には鈍い段がつく。14は壺の口頸部である。



第14図　オテカタ遺跡出土遺物②（1/3）

口縁部は緩やかに外に開き，端部は強いナデで垂直な面をなす。頸部には２条の隆線が巡り，その下位に櫛描波状文を施す。**13・14** とも 11Ｔのａ層出土。**20** は新羅系小形壺の胴部片であろう。頸部との境に沈線を巡らし，頸部には放射状文を，胴部にはコンパス文を施す。８Ｔの第２層出土。**21** は短頸壺の胴部片である。縦位の平行タタキの後，数条の平行沈線を巡らす。12Ｔ出土。**15** ～ **19** は須恵器である。**15** は擬宝珠つまみの付いた坏蓋である。内面のかえりは小さく，断面三角形をなす。端部は丸く仕上げられる。８Ｔの第３層出土。**16** は古相の坏蓋である。端部は鋭く，内面に段をもつ。体部の稜は明瞭だが，口縁端部ほどシャープさはない。天井部は大部分がヘラケズリされる。４Ｔの第３層出土。**17** は坏身の口縁部である。立ち上がりは短く，内傾している。７Ｔの第３層出土。**18** は高台をもつ坏である。口縁部は緩く外反し，断面方形の高台は内底面が接地する。７Ｔの第３層出土。**19** は長頸壺の胴部である。最大径の部分には沈線状のくぼみが巡る。７Ｔの第３層出土。

22・23 は白磁碗Ⅳ類の玉縁口縁である。**22** は９Ｔの第２層，**23** は 12Ｔの第２層出土である。

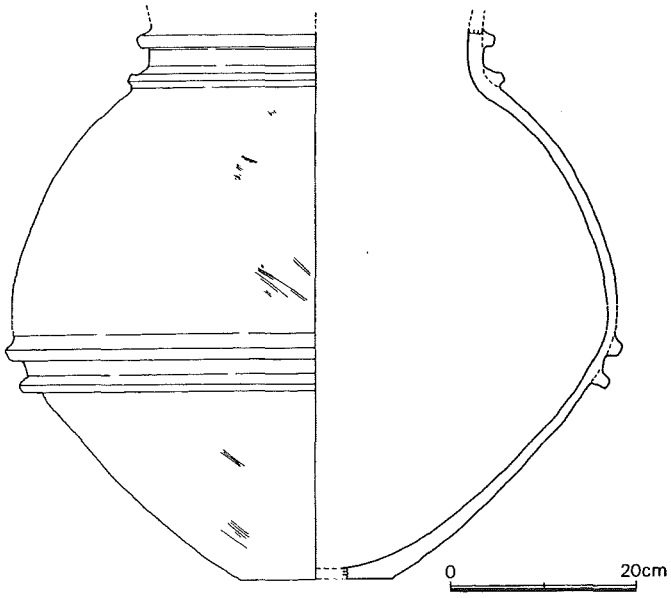
24 は東播系のこね鉢口縁部である。８Ｔの第３層出土。**25** は朝鮮系無釉陶器の口縁部片である。頸部に波状文を描く。９Ｔの第３層出土。**26** は初期高麗青磁碗の底部である。高台は幅広の蛇ノ目高台で，釉は全面にかかる。３Ｔの第３層出土。**27** は低い高台をもつ薄手の白磁皿である。釉は高台畳付までかかるが，内面は掻き落とす。見込みは圏線で画され，放射状に浅い沈線が施される。７Ｔの第２層出土。**28** は白磁碗Ⅴ類の底部である。高台は高く，内部は露胎。見込みに櫛描文を施す。９Ｔの第２層出土。**29** は土師質の小皿である。外底面には板目圧痕が残る。口縁径 8.6cm，底径 6.5cm，器高 2.0cm を測る。８Ｔの第３層出土。

30 は甕の口縁部が内側へ逆Ｌ字状に屈曲したものである。上面は平坦になり，貝目痕がつく。**31** は常滑焼の甕である。鉤形に屈曲した口縁部の内側は釉剥ぎされている。対馬では峰町の海神神社に次いで２例目であるという。**30・31** は 12Ｔ出土。

32・33 は朝鮮系雑釉陶器である。**32** の高台は無く，露胎の外底部中央はくぼみ，見込みに砂目が残る。７Ｔ出土。**33** は幅広の高台畳付けに沈線をもつ。見込みには胎土目の目跡がつく。11Ｔの第２層出土。

第 15 図は弥生時代後期の大型壺形土器である。頸部は太く，直立して伸びる。頸基部には２条の突帯を巡らす。胴部は球形に近く，最大径よりやや下がった位置に下向きの台形突帯が２条巡る。底部は平底である。土器片は 11Ｔのｂ層から，２箇所に分散した状態で出土した(第 11 図)。

この他にも，明青花磁器，李朝白磁，粉青沙器，滑石製石鍋，扁平磨製石斧(未製品)，不明鉄製品，鉄滓，軽石等が３Ｔ・４Ｔ・７Ｔ～９Ｔを中心に出土している。



第 15 図　オテカタ遺跡出土遺物③（1/8）

第4章　まとめ

豆酘は対馬の中でも古い伝統や慣習を今日に色濃く残す特異な集落であることは先に述べた。オテカタ遺跡の周囲も，多久頭魂神社の神事に用いる赤米を栽培する水田が一面に広がる。今回は水田部まで調査は及ばなかったが，厳原町教育委員会の尽力により，地元の方々の理解と協力を得て，無事に調査を実施できたのは幸いであった。遺跡の性格や範囲を明確にするという当初の目的を達成するには不十分な調査であることは承知しているが，これまで不明であったオテカタ遺跡について新たな知見が加わったのは事実である。以下，調査結果をもとに総括していくことにする。

まず，土層については九州大学の調査と地点を異にするせいか，一致しない所があった。例えば，遺物包含層は「第Ⅲ層はほぼ弥生後期前半期の単純層で，第Ⅳ層は，中期～後期層である」(下條 1996)と，部分的ながら２面存在することが報告されている。今回の調査では，遺物包含層とした第３層は土師器や須恵器等が主体を占め，５～７世紀代と考えられる。第３層は詳細に観察すれば分層も可能であろうが，丘陵裾部の９Ｔ以外に弥生土器はほとんどみられなかった。

遺物は全部で 917 点が出土した。最も多いのが須恵器で，次いで土師器，陶質土器の順となり，これらで総点数の 80%を占める。弥生土器は３%しかない。出土層位は第３層が中心で，遺物包含層が残っていた３Ｔ・４Ｔ，７Ｔ～９Ｔからの出土が多い。第２層の出土遺物は古墳～中世までと年代幅があった。中世は国産土器や貿易陶磁器の年代からすると，11 ～ 12 世紀代と 15 ～ 16 世紀代の二つにピークがあり，本土部の傾向に近い。

注目すべきは３Ｔ・４Ｔ・７Ｔ・９Ｔから出土した玄界灘式製塩土器である。対馬では上県町シタル万人塚古墳，峰町大田原ヤモト遺跡に次いで３例目となる。第３層からの出土で，時期的には概ね古墳時代～古代と考えられる。玄界灘式製塩土器は８世紀後半～ 10 世紀という年代観が与えられているようであるが，この時期の遺物は今回出土していないため，壱岐郡勝本町の串山ミルメ遺跡と同様，初源期の資料に位置づけられるだろう。

遺構ではピットや住居跡と思われるものが３箇所で確認された。７Ｔはピットの隣から古墳時代前半の長胴甕が出土しており，弥生時代の遺物がほとんどないことを考慮すると，これと近似した時期の遺構と推測される。８Ｔはピットに伴う遺物は判然としないが，７Ｔと包含層の状況は同じであり，古墳時代のものと思われる。

９Ｔは土坑(Ｐ１)とピット(Ｐ２)，住居跡の一部が検出された。Ｐ１とＰ２は覆土を同じくし，Ｐ２から６世紀代の土師器甕が出土したことで，これに近い年代が与えられよう。一方，住居跡と思われる遺構は床面直上から弥生中期中頃～後半の甕が検出された。仮に住居跡とすれば，これまで明確な集落遺構が見つかっていない対馬において，貴重な資料となり得る可能性がある。

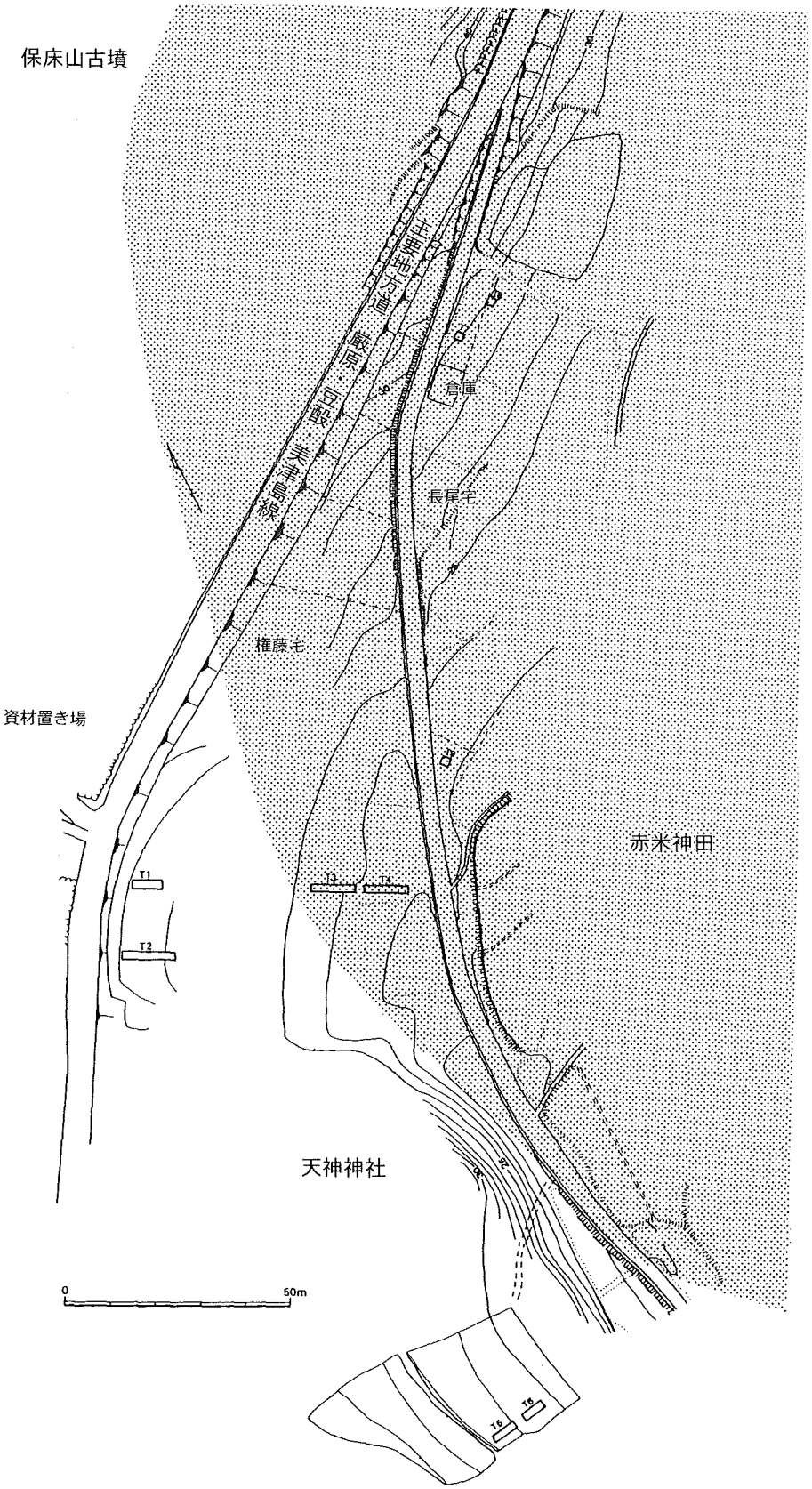
オテカタ遺跡の中心は保床山古墳のある丘陵裾部～神田川西岸にかけての一帯と思われ，現在水田として利用されている地下には，遺跡が良好に残存している可能性が高い(第 16 図)。豆酘の集落も遺跡と重なり合って営まれていることは確実で，さらなる詳細調査の実施が望まれよう。

参考文献

下條信行 1991　「オテカタ遺跡」小田富士雄編『日韓交渉の考古学(弥生時代編)－遺跡解説－』

下條信行 1996　「オテカタ遺跡」『原始・古代の長崎県』資料編Ⅰ　長崎県教育委員会

宮崎貴夫 1994　「長崎県」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店
横山浩一 1984　「玄界灘式製塩土器(上)」『九州文化史研究所紀要』29 号　九州大学文化史研究施設
横山浩一 1985　「玄界灘式製塩土器(中)」『九州文化史研究所紀要』30 号　九州大学文化史研究施設



第 16 図　オテカタ遺跡範囲推定図

図　　版

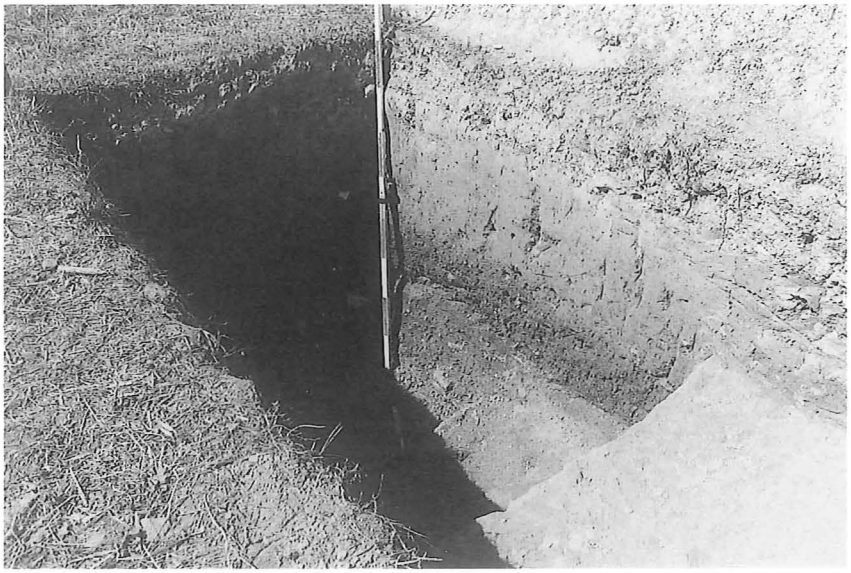
（オテカタ遺跡）

豆酘遠景

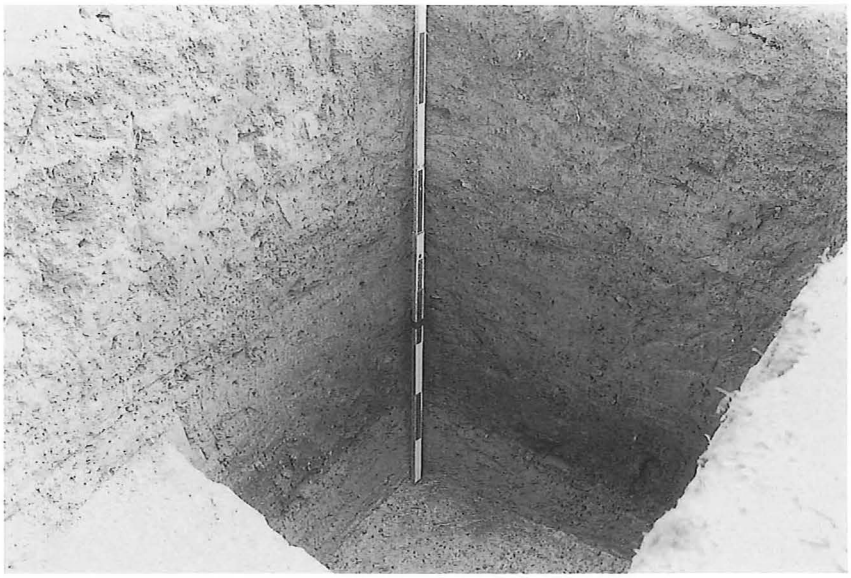
保床山丘陵から
天神神社を望む

調査風景

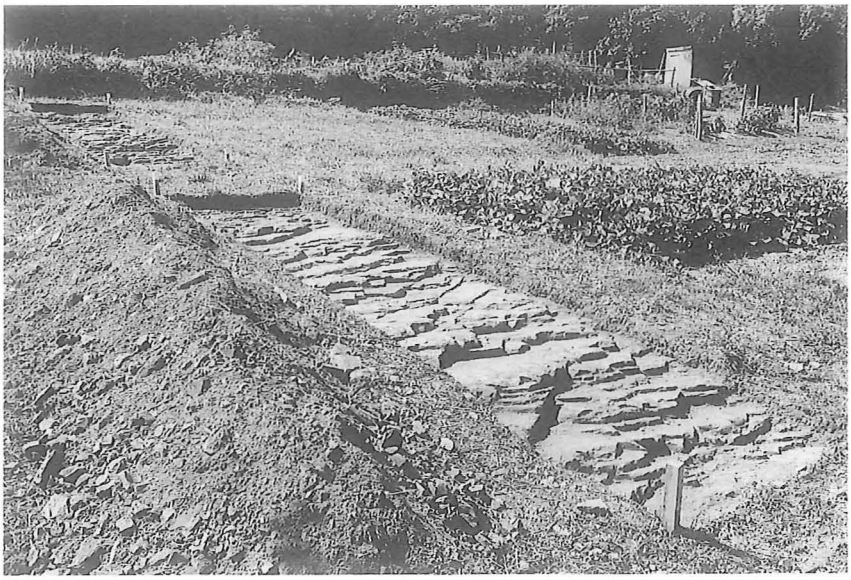
図版２



3T 西壁



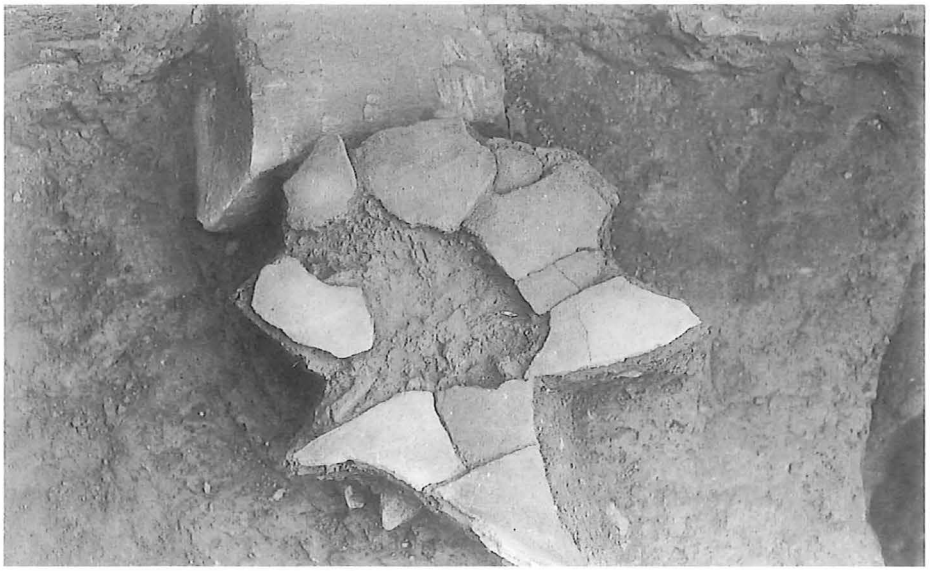
4T 東壁



5T・6T

7T 北壁

7T 検出遺構

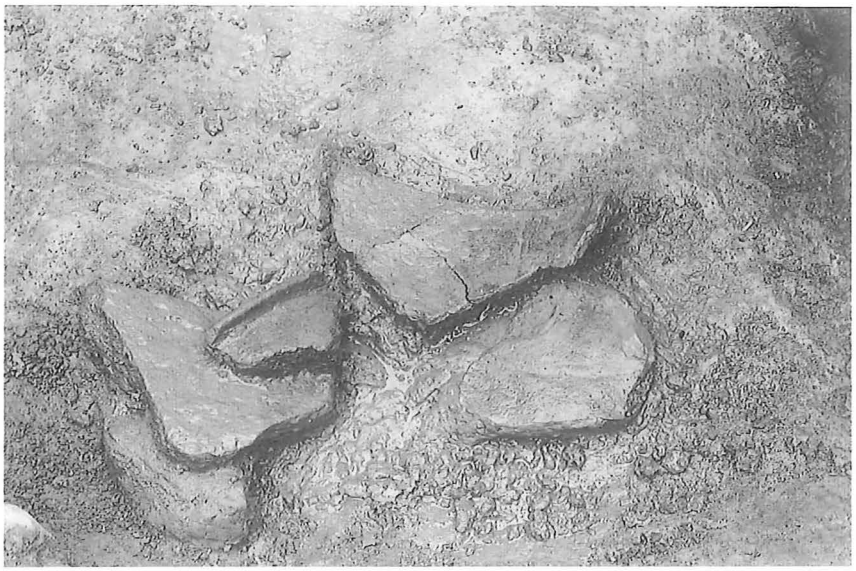


7T 遺物出土状況

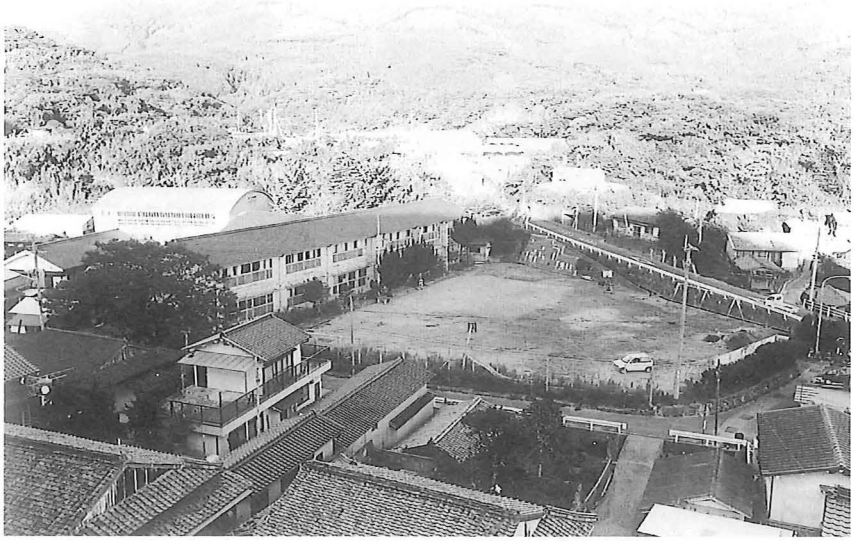
図版４

9T 検出遺構①

9T 検出遺構②



9T 遺物出土状況

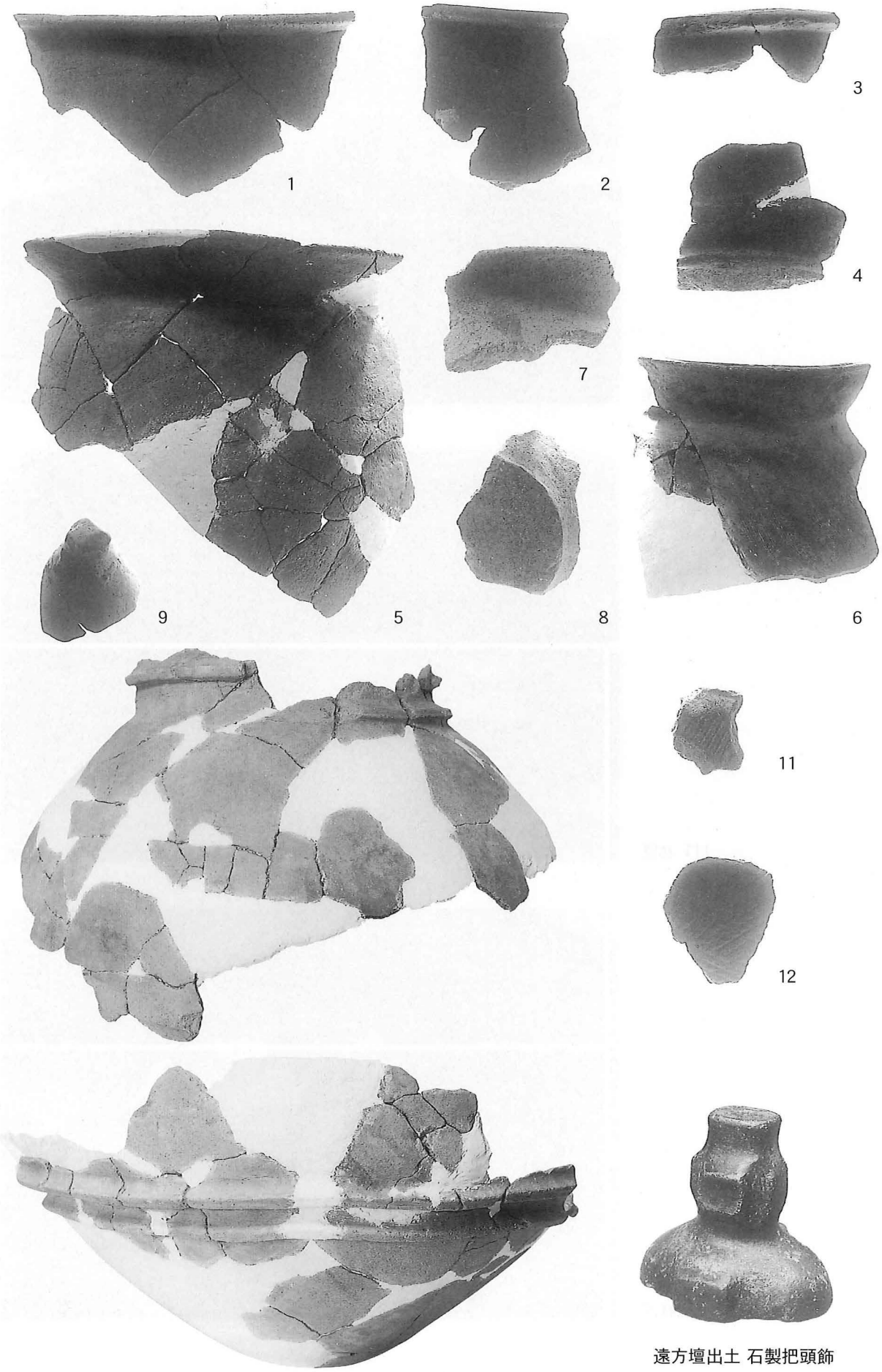


旧豆酘小学校跡地

11T 北壁

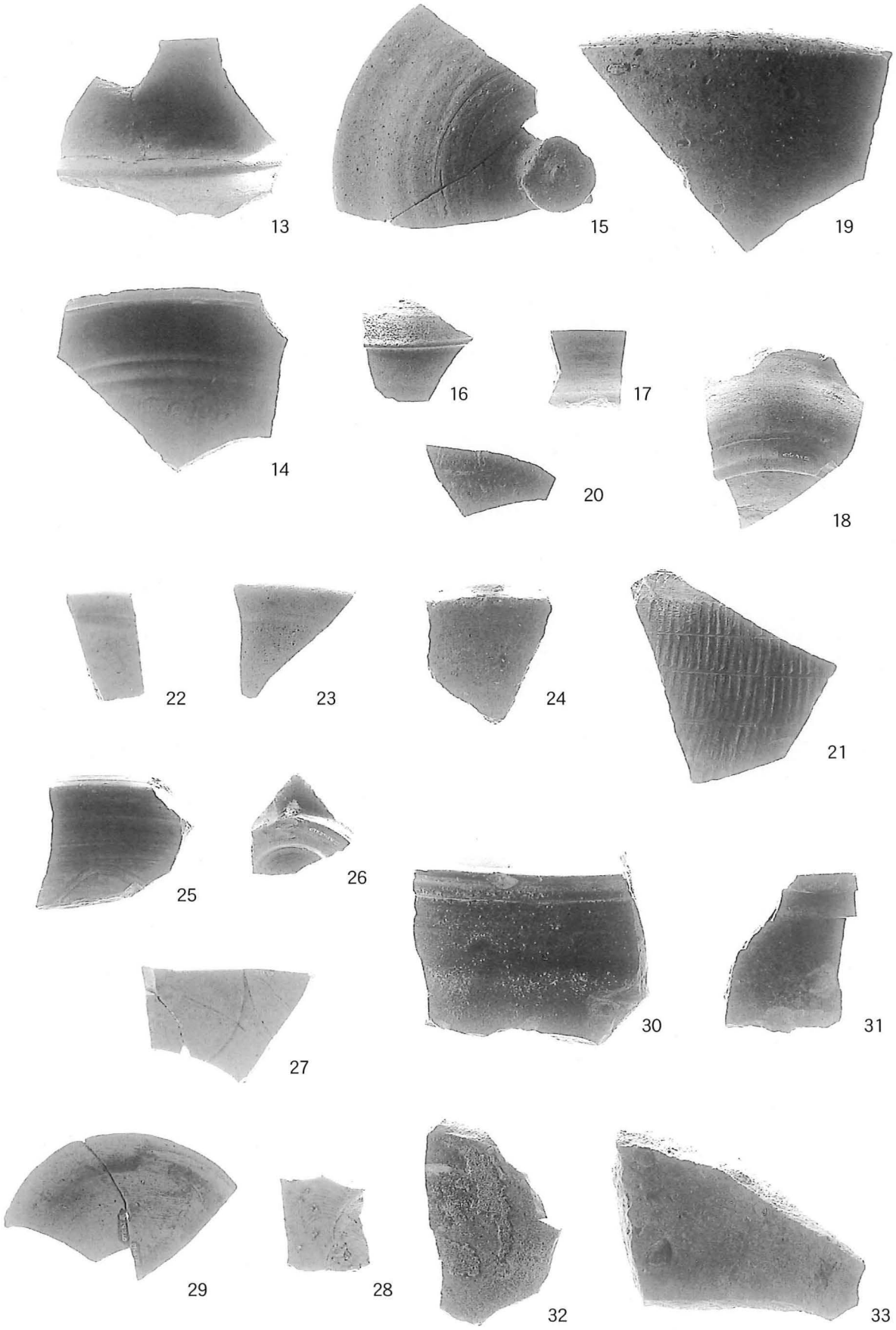
11T 遺物出土状況

図版６



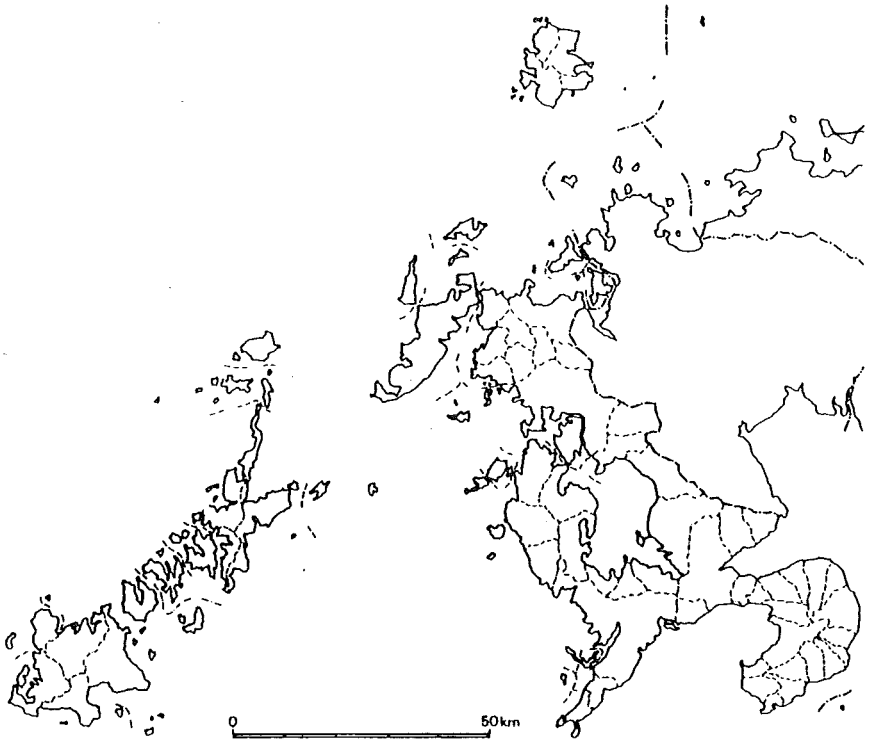
遠方壇出土 石製把頭飾

※番号は第13図に対応



※番号は第14図に対応

第Ⅱ部　水崎(仮宿)遺跡



例　　言

1．本書は，長崎県上県郡美津島町大字尾崎字仮宿に所在する水崎(仮宿)遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，長崎県学芸文化課が主体となり，美津島町教育委員会の協力を得て平成13年12月10日から12月19日にかけて実施した。

3．調査関係者は以下のとおりである。

調査担当	長崎県教育庁学芸文化課	主任文化財保護主事	福田一志
		文化財調査員	内藤かおり
調査協力	美津島町教育委員会		田中淳也

4．本篇に掲載している遺物の図化に際しては，小林利恵子・近藤慶子・松尾直子の協力を得た。また，製図については佐藤いづみ・渡辺洋子の協力を得た。

5．本篇の執筆編集は，福田一志の協力を得て，川口洋平が行った。

本　文　目　次

第1章 地理的・歴史的環境 …… 36

第2章 調査の経緯 …… 37

第3章 調査内容 …… 38

第4章 総括 …… 44

挿　図　目　次

第１図　水崎(仮宿)遺跡の位置 …… 36

第２図　遺跡周辺図 …… 37

第３図　TP 配置図 …… 39

第４図　TP 平面及び断面図 …… 40

第５図　出土遺物① …… 43

第６図　出土遺物② …… 44

第７図　出土遺物③ …… 44

第８図　出土遺物④ …… 44

図　版　目　次

図版１(調査風景・TP ４・TP ５) …… 47

図版２(TP ６・TP ７・TP ７トレンチ) …… 48

図版３(TP10 ピット１・TP10 トレンチ・TP11) …… 49

図版４(出土遺物) …… 50

図版５(出土遺物) …… 51

図版６(出土遺物) …… 52

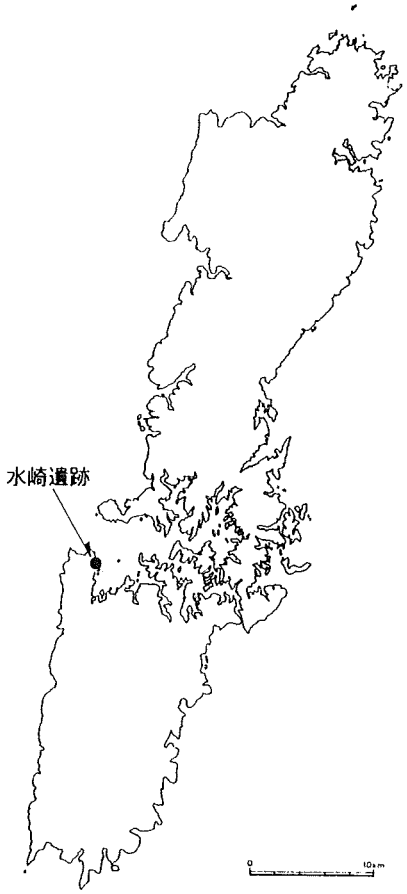
第１章　地理的・歴史的環境

対馬は，壱岐と共に朝鮮半島と九州の間に位置し，南北 82km，東西 18kmの南北に長い島である。美津島町は対馬のほぼ中央に位置し，島を南北に分ける浅茅湾の東部から南西部にあたる。本遺跡は，美津島町の西部にある尾崎半島の東岸に位置し，浅茅湾奥を向いている。現在は海辺の静かな町であるが，近年になり護岸工事などで昔からの風景が失われつつある。遺跡周辺は，ほとんどが畑であるが，年間を通して北西の風が強く，作物の出来はよくない。

対馬には周知された遺跡がおよそ 320 あるが，そのうち美津島町には 113 の遺跡が存在する。遺跡の多くは弥生時代から古墳時代にかけての箱式石棺であるが，町の中心である鶏知には島内唯一の高塚墳が群集する根曽古墳群があり，古墳時代においては付近が対馬の中枢であったと考えられる。七世紀になると，朝鮮半島情勢の険悪化から対馬には朝鮮式山城の金田城が置かれた。水崎遺跡同様，浅茅湾に突き出た半島を利用したもので，特別史跡に指定され美津島町が継続して調査を行っている。

古代においては，対馬は壱岐と共に国に準ずる島の扱いを受け，厳原に島府が置かれた。その場所は，現在の厳原町役場付近と推定されているが，実態については不明である。中世になると，対馬では頻繁に権力が交代し，倭寇の根拠地となった。とくに朝鮮半島は十三世紀頃から倭寇の横行に悩まされ，ついに応永二十六年(1419)，李従茂率いる朝鮮の軍船 220 余船，軍兵 17,200 余の軍勢が来襲し，水崎遺跡のある尾崎がまず攻められたという。

朝鮮の申叔舟が編纂した『海東諸国紀』(1471 年成立)には，尾崎周辺の地名も収録されているが，水崎は「敏沙只浦」，仮宿は「可里也徒」にあたると推定されている(註１)。また同書から，この地域からの朝鮮通行者として平茂続がみえ，「中枢」という朝鮮の官職をえていたこと，さらに彼が「賊首早田之子」であったことがわかる。早田氏の動向については，比較的豊富な史料から研究も多く(註２)，発掘調査成果との比較検証が今後の課題といえるだろう。



第１図　水崎遺跡の位置

【註】

１．佐伯弘次「中世の尾崎地域と早田氏」『水崎(仮宿)遺跡』美津島町文化財保護協会 2001

２．田中健夫，田村洋幸，中村栄孝，長節子，佐伯弘次などによる論攷がある。

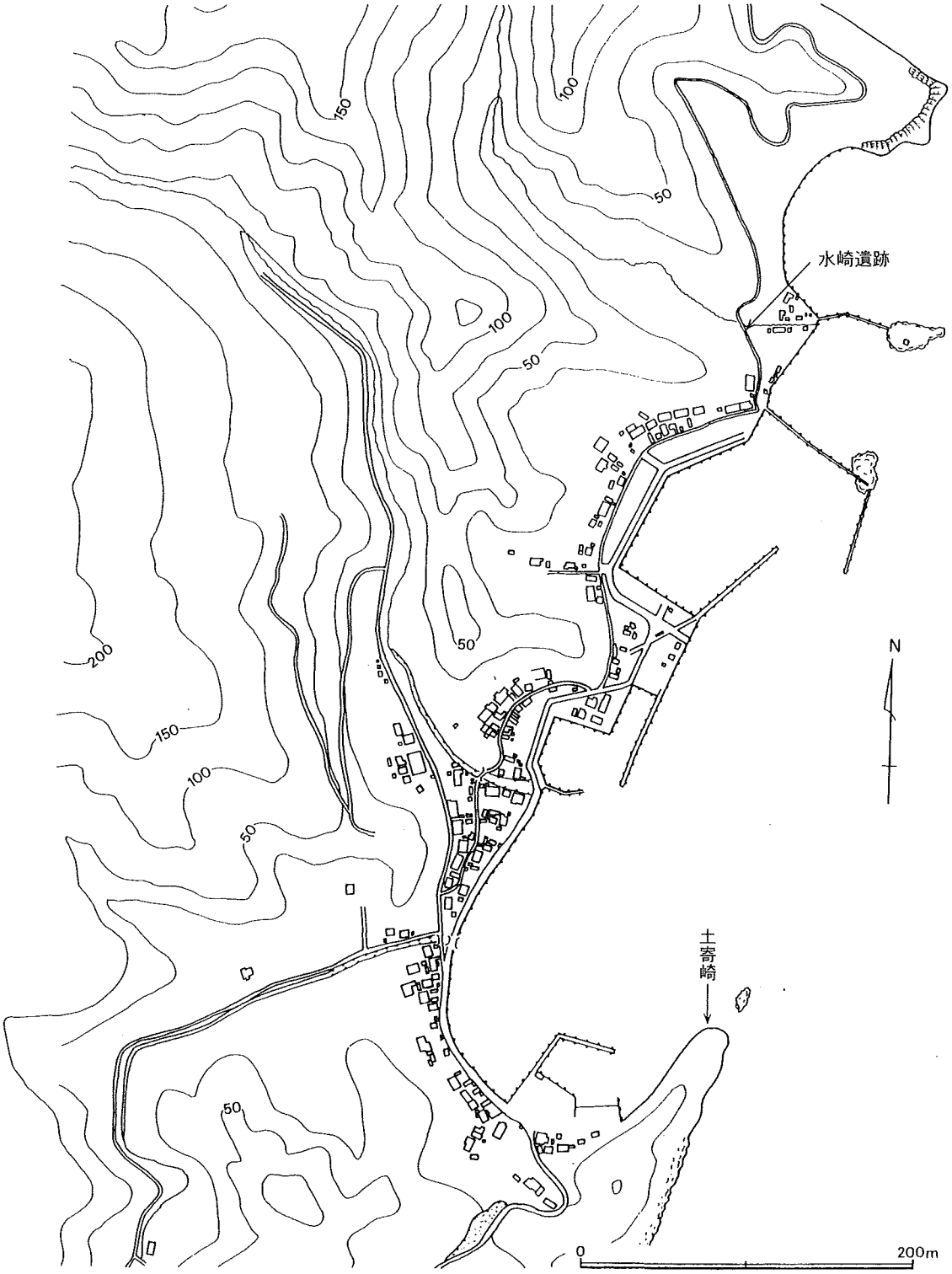
第２章 調査の経緯

水崎遺跡の調査履歴は以下のとおりである。

①林道拡幅に伴う発掘調査，1997 ～ 1998，52㎡，『水崎遺跡』美津島町教育委員会 1999

②緊急雇用対策事業，2000，200㎡，『水崎（仮宿）遺跡』美津島町文化財保護協会 2001

①において中世期の貿易陶磁が多数出土し，極めて高い割合で東南アジア陶磁が含まれていることが明らかになった。さらに付近の地名や朝鮮通交者の名が『海東諸国紀』に記されることから，倭寇



第２図　遺跡周辺図

の実態を解明する手がかりとして全国的にも大きく注目されることとなった。②においては，遺跡の拡がりを確認することに重点が置かれたが，朝鮮，東南アジア産陶磁に加え類例のないメノウ製の石帯や中国の大形銭も出土し，遺跡の多様な性格を再確認する結果となった。今回の調査は，長崎県が実施している主要遺跡内容確認調査事業に伴うもので，遺跡の現状および内容を新たに確認することを目的としている。

第3章 調査内容

第1節　調査方法

調査は，２ｍ×２ｍを基本とするトレンチを調査履歴や地形等を考慮して任意に設定して行った。トレンチ(以下TP)は，設営順にTP １～TP13とした。掘削は人力で行い，遺物包含層および遺構については精査を行った。

第2節　各トレンチの概要

各TPの調査概要は以下のとおりである。

TP 1　旧調査区の北側に設置したもので，表土下約0.1mで暗黒褐色の遺物包含層が確認された。この層は，かつての調査の第２層に相当するものと考えられ，同様に多くの遺物を包含している。包含層の厚さは約0.1mで，調査区から北西および南東方向に堆積していることが判明した。

TP 2　表土下約0.1mに，明褐色の粘土層が堆積していた。この粘土層からは韓半島産の無釉陶器が出土している。堆積の状況から貼り床とも考えられる。

TP ３～７　表土下に頁岩の小礫が堆積しており，遺物は出土しなかった。

TP 8　遺構・遺物ともに確認されなかった。

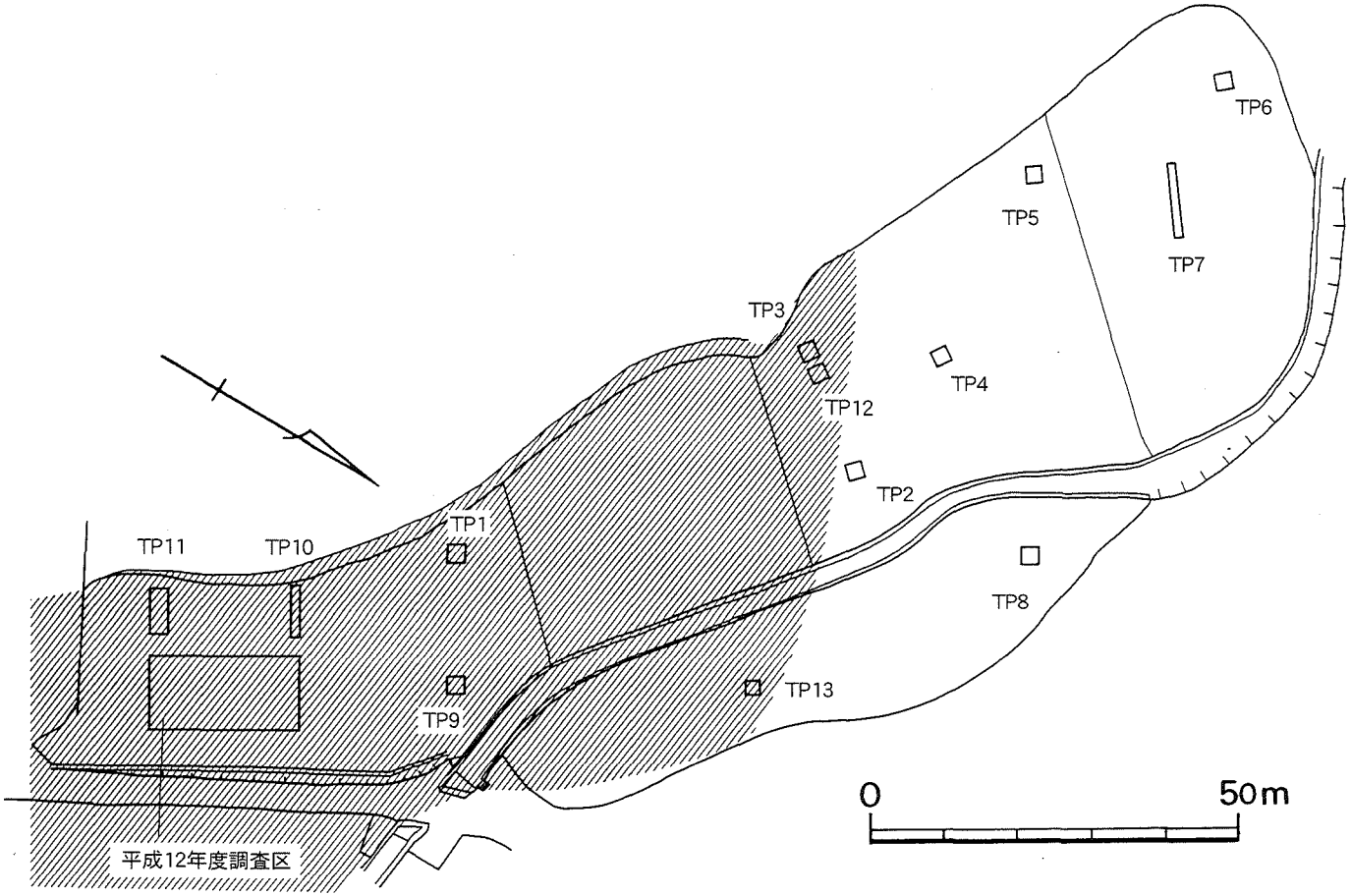
TP 9　表土下約0.1mで暗黒褐色の遺物包含層が確認された。また，第３層の黄褐色小礫層を切り込んでピットが確認され，骨などが出土している。

TP10　旧調査区から北側の丘陵際まで設定したものである。表土下の第２層が遺物包含層で，中世の遺物を含んでいる。この層を除去すると，第３層を掘り込むピットが検出された。ピットからは，陶片のほか銭貨も出土している。また，西側を深掘りして土層の確認を行った。第３層は明褐色の頁岩の小礫層，第４層は暗褐色土層，第５層は灰黄褐色の頁岩小礫層，第６層は暗茶褐色粘土層となっている。第５，６層から弥生土器の小片が出土しており，弥生時代の遺物包含層が南側にある可能性を示唆している。中世の遺構が営まれ，無遺物である第３層は，旧調査区側で厚く堆積している。これは北西から南東に傾斜する山裾にそって堆積しているためであろう。

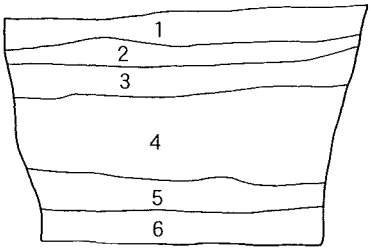
TP11　TP10と同様に旧調査区の北側に設定したものである。表土下約0.1mで炭化物を含む焼土の集中が一部で確認された。鉄滓も含まれているが旧調査の結果から，これらの焼土は近世のものであると考えられる。

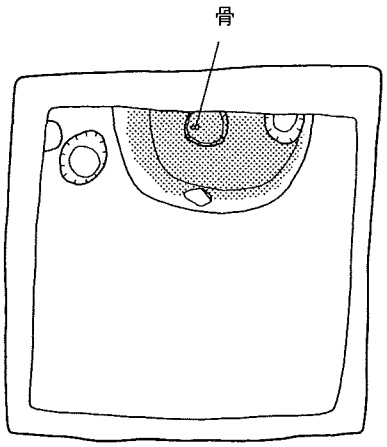
TP12　TP ２の南側に設定したが，TP2で確認された明褐色の粘土層は確認できなかった。

TP13　TP ８同様，小川を挟んで対岸に設定した。TP ８と異なり，第２層の遺物包含層が確認され，遺跡の範囲が付近まで及んでいることが明らかになった。

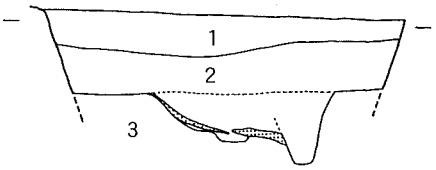

TP6
TP5
TP7
TP3
TP4
TP12
TP2
TP1
TP11
TP10
TP8
TP13
TP9
0
50m
平成12年度調査区

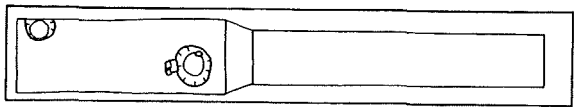
第３図　ＴＰ配置図



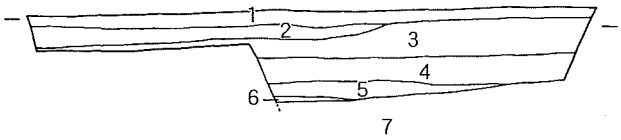


TP-5　東壁セクション
1層　表土
2層　明黄色粘質土（黄白色粘土に小礫が混入、硬くしまっており、整地層と考えられる）
3層　暗灰褐色土（やや土壌化し、粒子状の微細礫を含む）
4層　暗黄色砂礫層（頁岩の小礫を主体とし、土壌化したものの中に入り込む）
5層　暗褐色小礫層（頁岩の小礫1cm内を主体とする層、山側からの水性堆積の状況を呈す。弥生土器はこの層下部より出土）
6層　灰黒色粘質土層（礫をほとんど含まず、粘性が強い。遺物の出土はない）



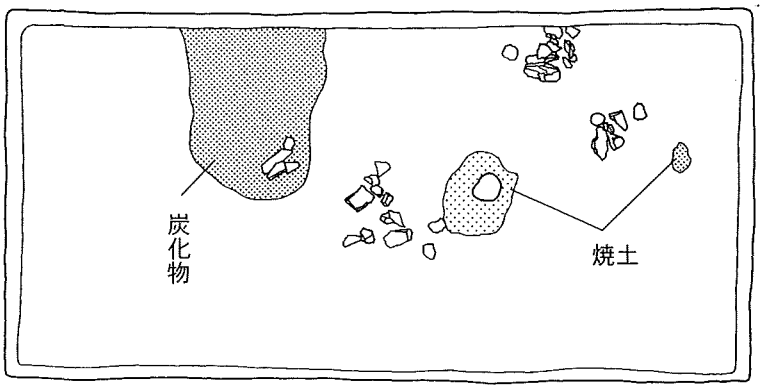


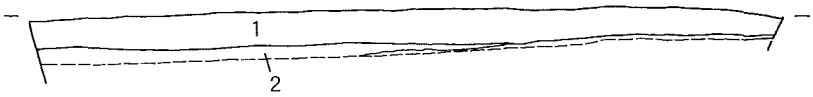
TP-9　南壁セクション
1層　表土
2層　暗黒褐色粘質土（遺物が多量に入る層）
3層　黄褐色小礫層（硬質で頁岩を含む）



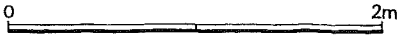
TP-10　東壁セクション
1層　表土
2層　暗黒褐色粘質土（包含層）
3層　黄褐色小礫層（硬質で頁岩の小礫が多く混入）
4層　暗灰色粘質土層
5層　暗黄色小礫層（水分を多く含む頁岩の小礫層）
6層　暗茶褐色粘土層（粘性が強くしまりがある）
7層　黄褐色小礫層

1～3層は前回の調査時に対応するが、前回の調査では今回の4層以下は確認できていないことから南から北方向へ堆積する層で北側ではかなり下部に確認されるものと思われる。5～6層にかけて須恵器片、弥生土器が出土する全体的にカーボンを含み7層までカーボンが入るが、7層以下については調査できなかった。





TP-11　東壁セクション
1層　表土
2層　暗灰色粘質土



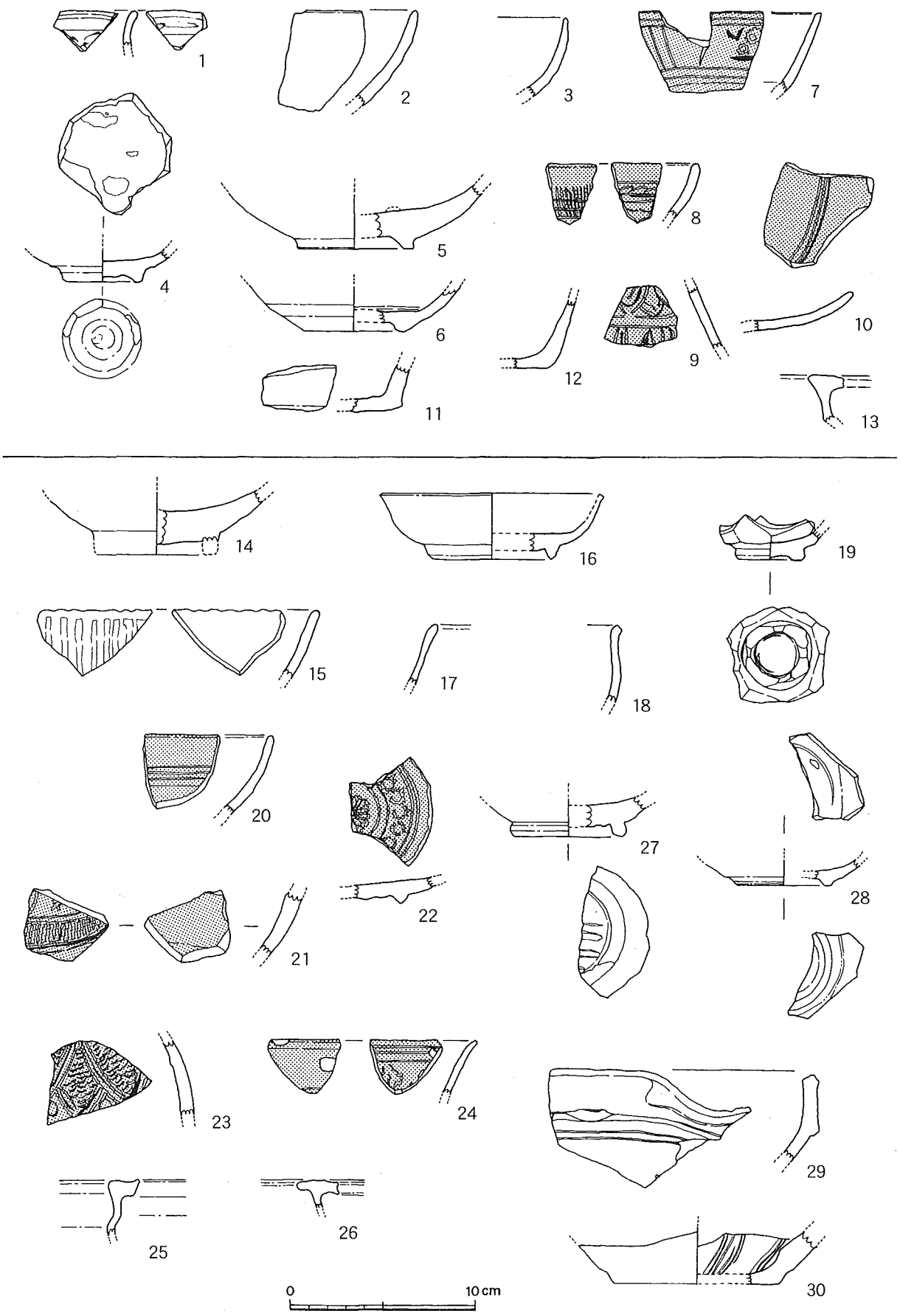
第4図　ＴＰ平面及び断面図

第3節　出土遺物

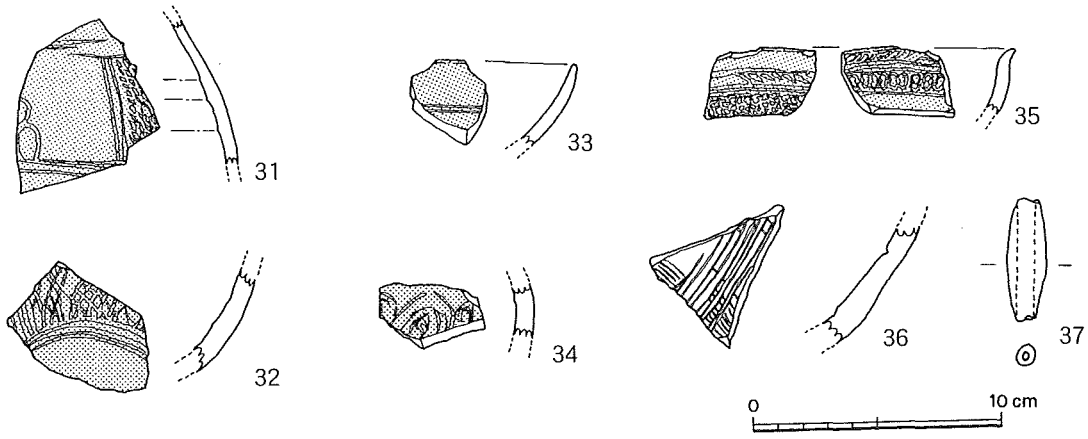
今回の調査では，コンテナ3箱の遺物が出土している。出土遺物は小片が多く，器形の不明なものも多い。37点を図化し，以下に詳細を記す。

1はTP11の表土から出土したベトナム青花の碗あるいは杯の口縁部である。胎土は多孔質で灰色を呈す。素地に化粧掛けし，透明釉をかけるが焼成が甘いためか，貫入が多く器表が荒れて汚れている。呉須は淡い青色に発色し，口縁部に連弧ふうの崩れた唐草が描かれる。本遺跡においては過去の調査でも出土し，その流入経路について問題を投げかけている。2はTP11の表土から出土した暗青灰色の釉がかかる鉢あるいは深皿である。焼成はやや甘く，貫入が多い。胎土は陶質で灰色を呈す。李朝産であろう。3はTP11の表土から出土した淡青色釉のかかる鉢あるいは深皿である。焼成がやや甘く貫入が多い。胎土は青灰色で陶質である。李朝産であろう。4はTP10の表土から出土した白色釉のかかる碗の底部である。焼成が甘く器表が荒れて汚れている。胎土は黄白色で多孔質である。見込みと高台畳付けに砂目がのこる。高台は削り出され，釉が高台内までかけられている。
李朝産であろう。5はTP11の表土から出土したガラス質の暗青灰色釉がかかる碗の底部である。全面施釉されるが，貫入が多い。焼成は比較的良く，青磁といってよいだろう。胎土は暗灰色できめがやや粗い。見込みと高台畳付けに胎土目がのこる。高台は削り出されている。李朝産であろう。
6はTP11の表土から出土したオリーブ色釉のかかる碗あるいは杯である。焼成は甘く，釉が風化して一部剥落しているが，青磁といってよいだろう。全面施釉され，胎土は青灰色で比較的きめ細かい。見込みは平坦で胴部との間に段がつき，圏線状の円が巡る。高台は碁笥底状に削られている。李朝産であろう。7はTP10のピット1から出土した象眼を施した杯あるいは鉢である。灰色の胎土に白土・黒土を象眼して花文や区画線を施し淡青色釉をかけている。焼成は比較的良いが，火を受けているのか器表が荒れている。見込みは平坦になると思われ，胴部との境に段がつく。粉青象眼と呼ばれるものであろう。8はTP11の表土から出土した象眼を施した碗の口縁部である。暗青灰色の胎土に白土で圏線などを象眼し，オリーブ色の釉をかけている。火を受けているのか器表が荒れている。粉青象眼の一種であろう。9はTP10のピット1から出土した徳利のような袋物の頸部である。暗青灰色の胎土に白土・黒土で蓮弁状の文様を象眼し暗緑灰色釉をかける。釉は半光沢で貫入が多い。10はTP10のピット2から出土した象眼を施した鉢または深皿である。暗青灰色の胎土に白土で圏線を象眼し，暗緑灰色釉をかける。火を受けて器表が荒れている。11はTP 3の表土から出土した無釉の焼締め壺の底部である。器肉はあずき色，器表は暗青灰色を呈す。胎土は精良で堅緻である。12はTP10の表土から出土した壺または甕の底部である。器肉はあずき色と黄白色が縞状に混じる。内外面ともに濁った緑灰色釉がかかる。施釉にはムラがあり，露胎の部分もみられる。13はTP11の表土から出土した甕の口縁部である。器肉はあずき色から紫色を呈し，器壁が薄い。口縁部は逆L字形で上面は露胎で二枚貝による重ね焼きの痕がみられる。内外面には濁った緑灰色がかかるが，色や質が12とよく似ている。14はTP 9のⅡ層から出土した中国産青磁碗の底部である。淡い青緑色釉がかかり，見込みにスタンプによる文様がみられる。高台内は蛇ノ目状に掻き取られる。胎土は灰色でやや粗い。15はTP 1のⅡ層から出土した中国産の細線蓮弁文青磁碗の口縁部である。光沢のある淡い青緑色釉がかかる。

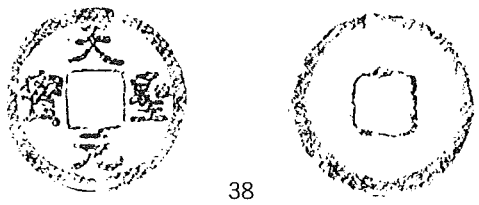
口唇部は稜花状に波打ち，胎土は白灰色で精良である。16はTP 9のⅡ層から出土した中国産の青磁の杯である。淡い緑灰色釉がかかるが，見込みと高台内は露胎となっている。胎土は灰色で黒色粒を含む。17はTP 9のⅡ層から出土した中国産の青磁碗の口縁部である。暗緑灰色のガラス質釉が厚くかかる。胎土は白灰色でやや不純物を含む。口縁部がやや外反している。18はTP 9のⅡ層から出土した中国産青磁碗の口縁部である。暗緑灰色ガラス質釉がかかる。胎土は暗灰色でやや粗く，口縁部は玉縁状になっている。19はTP 1のⅡ層から出土した中国産の白磁の杯である。光沢のある白色釉がかかるが，高台は露胎となっている。胎土は黄色がかった白灰色で黒色粒を含む。胴部は八角形の角杯で，高台畳付けも四分割されアーチ状に削られる。20はTP 1のⅡ層から出土した象嵌を施した鉢あるいは深皿の口縁部である。暗緑灰色釉がかかり，内面に3条の圏線が白土で象嵌される。胎土は黒灰色でザラザラとしている。火を受けたためか，外面が風化し，一部釉が剥落している。21はTP 9のⅡ層から出土した壺と考えられる袋物である。暗緑色釉がかかり，白土と黒土で象嵌を施している。胎土は灰褐色で多孔質である。内面上部には沈線状に段がつき，下部は露胎となっている。22はTP 9のⅡ層から出土した象嵌を施す皿である。淡い青灰色の釉をかけ，白土で象嵌を施す。見込みに圏線を挟んで花文を配している。胎土は灰褐色でザラザラしている。高台は断面逆三角形で削り出されている。23はおそらく梅瓶形となる袋物の肩部である。暗緑灰色釉がかかり，白土と黒土で象嵌を施す。胎土は灰色で多孔質である。24はTP 9のⅡ層から出土した碗の口縁部である。暗緑灰色釉がかかり，内面に白土で象嵌を施す。胎土は灰色で陶器質である。口縁部はやや外反している。25はTP 11のⅡ層から出土した甕の口縁部で風化のため釉が剥落している。胎土は黒灰色で粒子を含む。26はTP 9のⅡ層から出土した甕の口縁部である。暗緑灰色釉がかかり，口縁部上面には貝目がのこる。胎土はあずき色で重層状に縞がみえる。器壁は薄い。27はTP 1のⅡ層から出土した緑灰色釉のかかる碗の底部である。釉は白濁しており，畳付けが露胎となっている。高台は削り出され，胎土は暗灰色で比較的精良である。李朝産であろう。28はTP 9のⅡ層から出土した皿または杯の底部である。光沢のある淡い緑灰色釉がかかるが底部外面および見込みは露胎となてている。胎土はやや粗く黒色粒を含む。高台は削り出され，碁笥底状になっている。李朝産であろう。29はTP 9のⅡ層から出土した褐釉の片口鉢である。胎土は灰色で比較的精良である。30はTP 9のⅡ層から出土したすり鉢の底部である。すり目は1単位7条で，胎土は赤みを帯びた灰褐色を呈す。内面に自然釉がかかり，外面は無釉である。備前産か。31はTP10のⅢ層から出土した瓶または壺の肩部である。暗緑灰色釉がかかり，白土で象嵌を施す。胎土は黒灰色を呈し，胎土は比較的精良である。32はTP10のピット2から出土した瓶または壺の肩あるいは腰の部分である。暗緑灰色の釉がかかるが，火を受けて溶解している。白土により象嵌を施す。胎土は黒灰色で精良である。33はTP10のⅡ層から出土した皿または鉢の口縁部である。暗緑灰色釉がかかり，白土で象嵌を施す。胎土は黒灰色で精良。34はTP10のⅢ層から出土した瓶または壺の胴部である。淡い緑灰色釉がかかり，白土と黒土で象嵌を施す。胎土は灰色で比較的精良である。35はTP 9のⅢ層から出土した杯の口縁部である。淡い緑灰色釉がかかり，白土で象嵌を施す。胎土は灰色でザラザラとしている。36はTP10のⅢ層から出土した瓦質のすり鉢である。外面にユビオサエ，内面はハケメの成形痕がのこる。すり目は5条で，胎土に砂粒を含む。37はTP10のⅡ層から出土した土錘である。暗黄橙色を呈し，焼成も良好である。胎土も精良である。


1
2
3
7
8
5
4
6
10
9
12
11
13
14
16
19
15
17
18
20
27
28
22
21
23
24
29
25
26
30
0
10cm

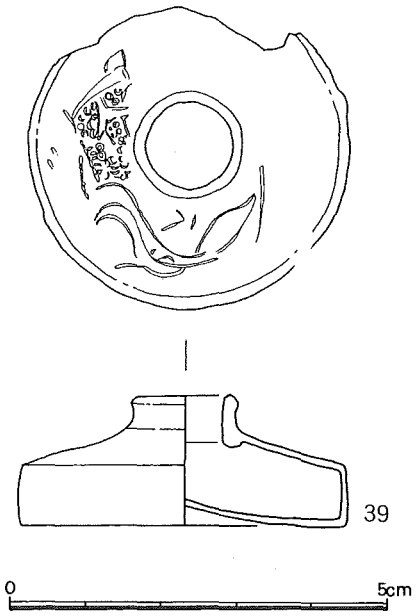
第５図　出土遺物(1)



第６図　出土遺物②



第７図　出土遺物③



第８図　出土遺物①

その他の遺物

38はTP10のピット２から出土した「天聖元寶」である。39はTP ６の南側の壁(層位不明)から出土した銅製の小形の壺である。肩部に線刻がみられるが，文様は不明である。

第４章 総　括

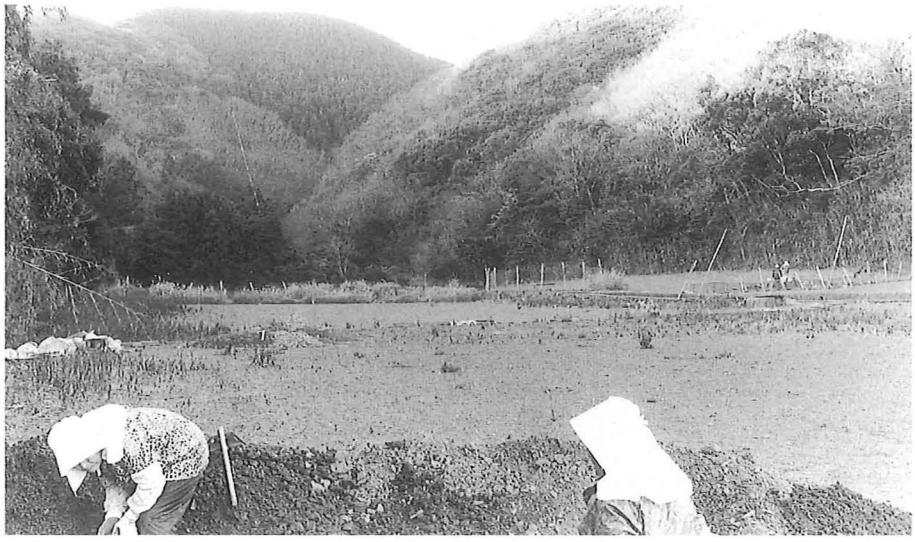
今回の調査によって水崎遺跡の範囲が第３図の斜線の範囲であることが明らかになった。当初，遺構がより明確に広がりをもって存在すると予想していたが，結果は逆で遺跡が極めて狭い範囲に限定され，遺構としても簡素なものであったことが判明した。これは，北側の山からの土砂の供給が多く，建物の設置に向かないことも原因のひとつと考えられる。あるいは主体となる遺跡が付近にまだ存在することも考えられるであろう。

『海東諸国紀』には，多くの地名が記されており，現在の地名との比定も行われている。それらの多くは遺跡として周知されていないものが多く，発掘調査による検証を経ないままに遺跡が破壊されている例もあると思われる。未周知の潜在的な遺跡の積極的な保護が必要であろう。

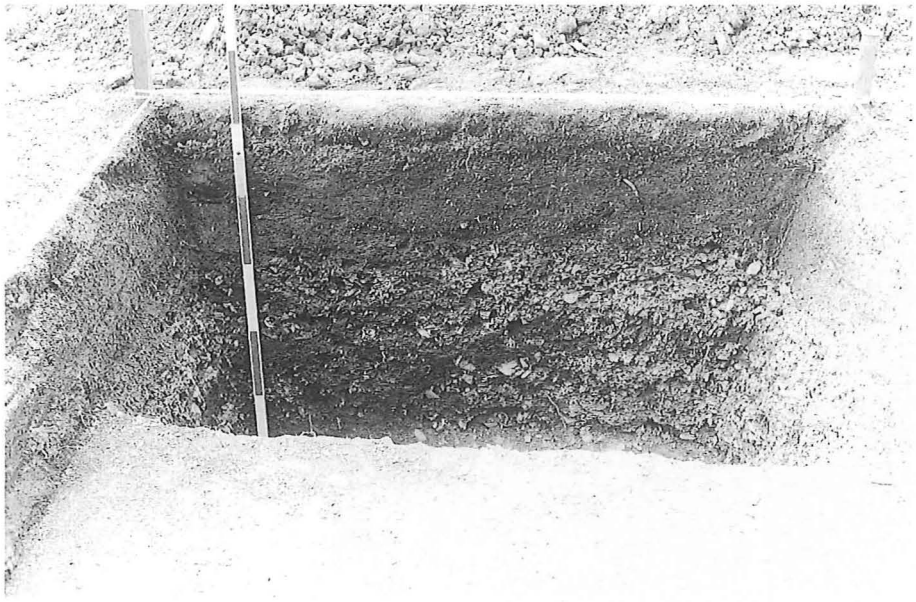
最後に，本報告は調査を担当した福田一志が，原の辻遺跡調査事務所へ転任になり，筆者が後を引き継いだものであることを記しておく。

図　　版

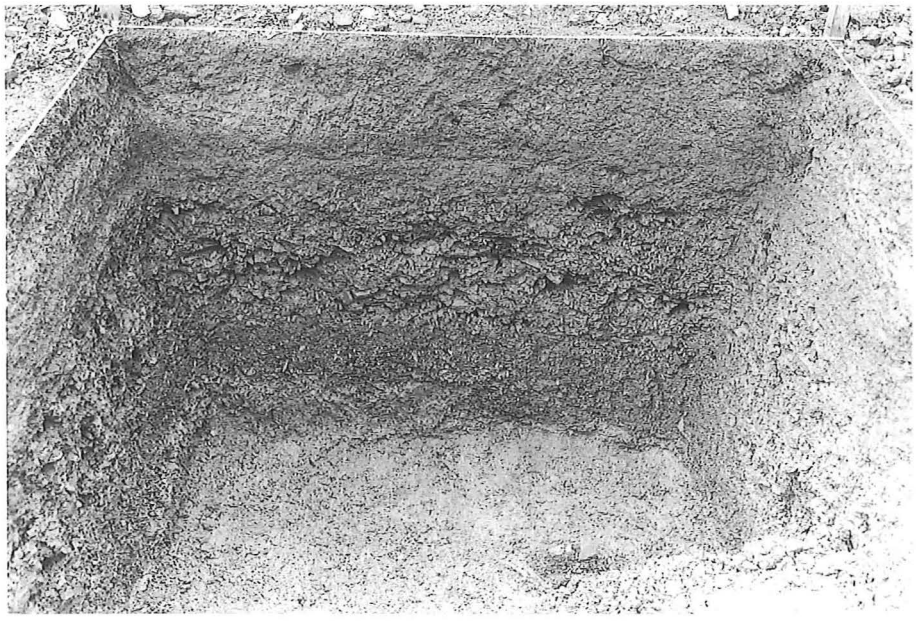
（水崎（仮宿）遺跡）



調査風景

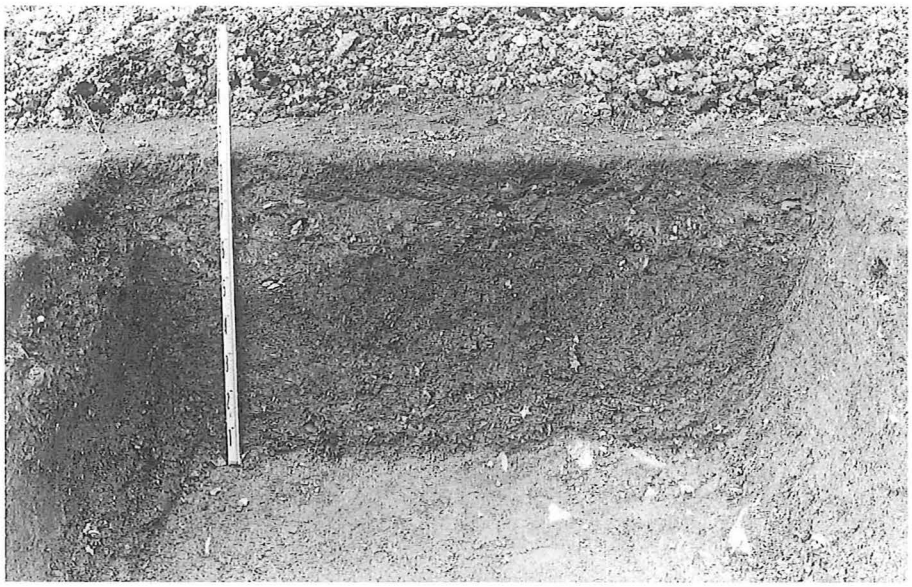


TP4

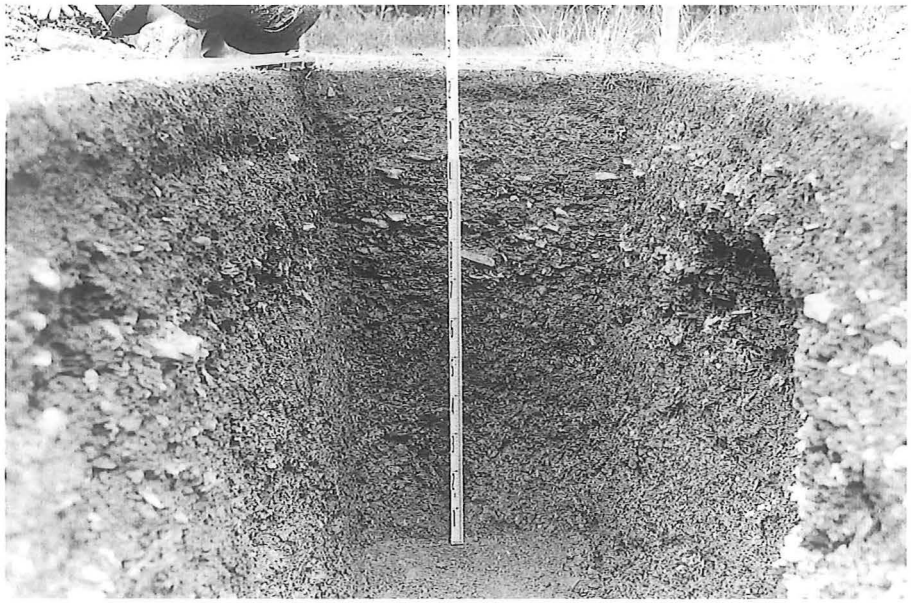


TP5

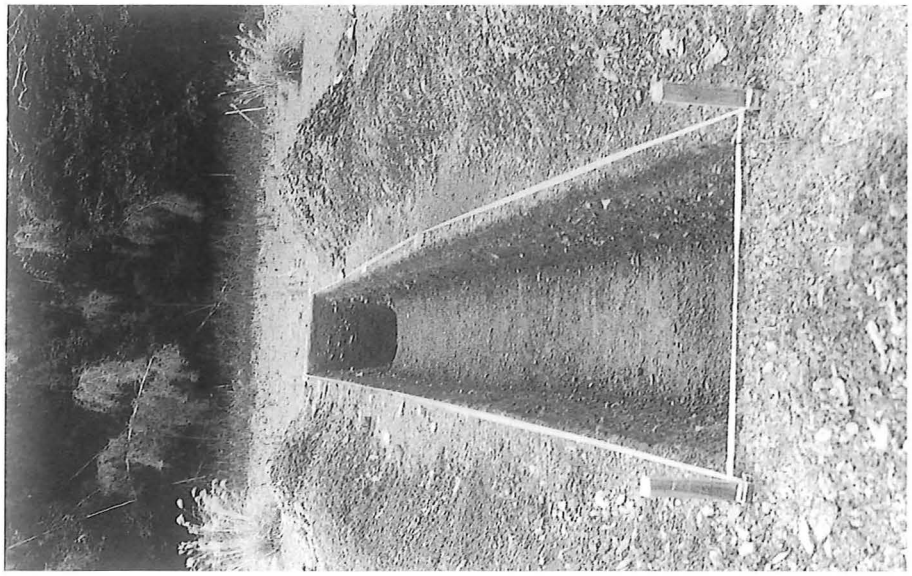
図版２



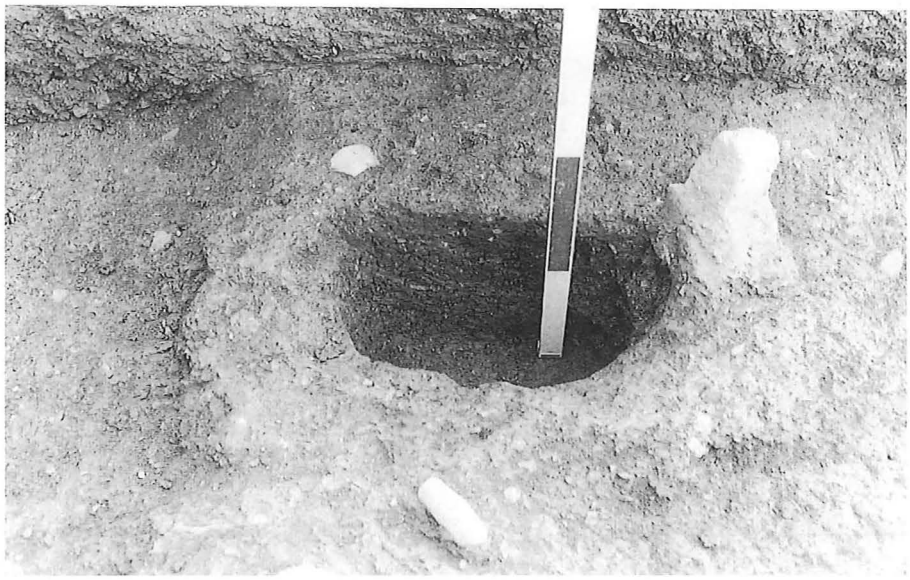
TP6



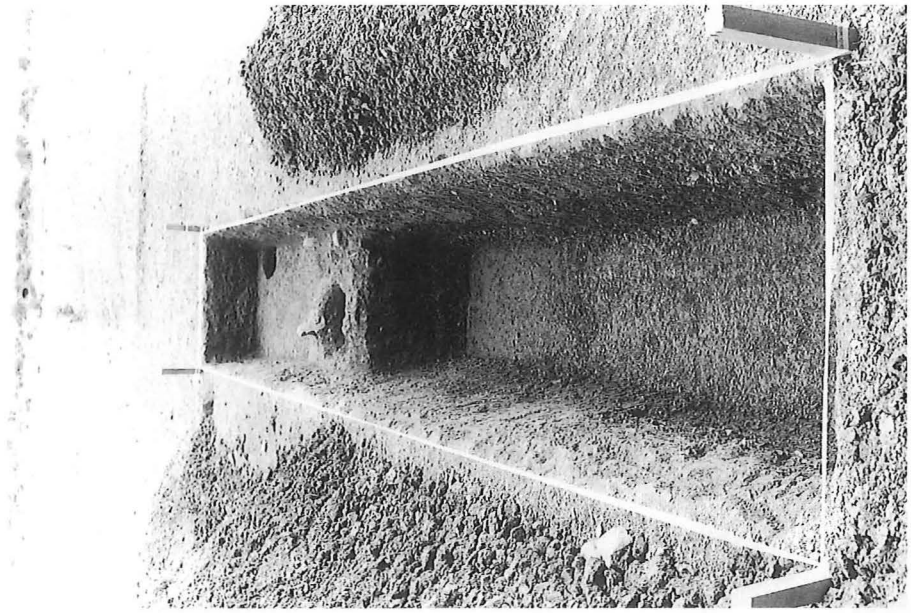
TP7



TP7 トレンチ



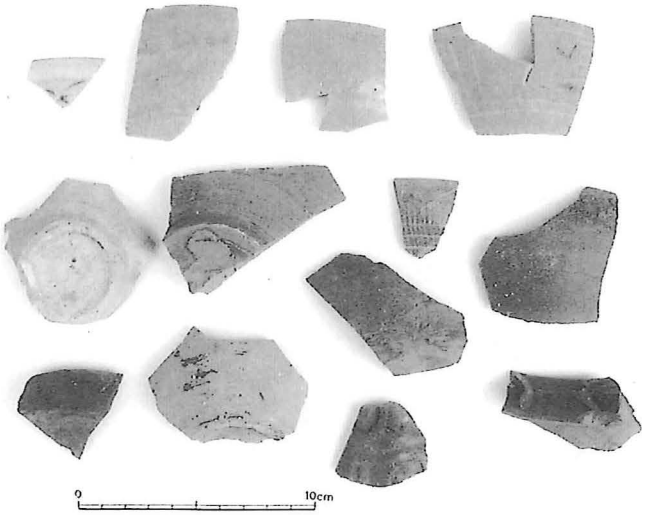
TP10 ピット1



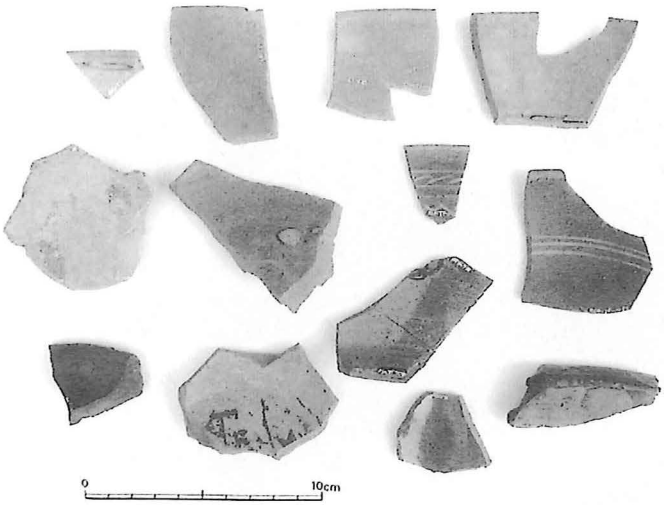
TP10 トレンチ

TP11

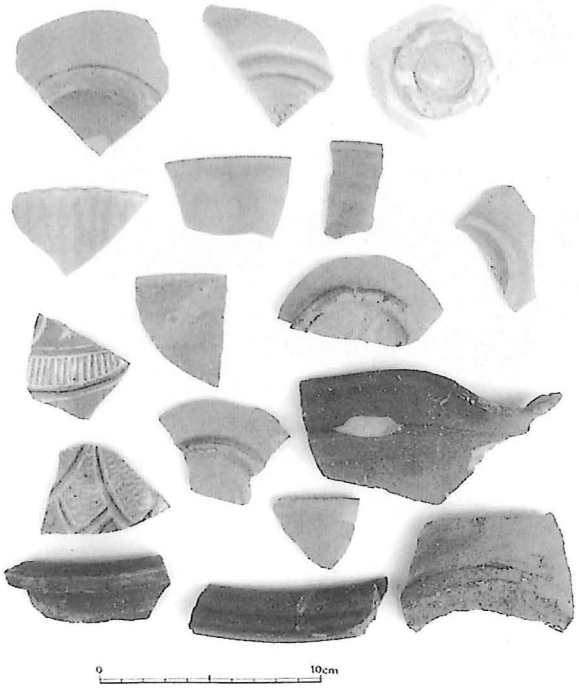
図版４



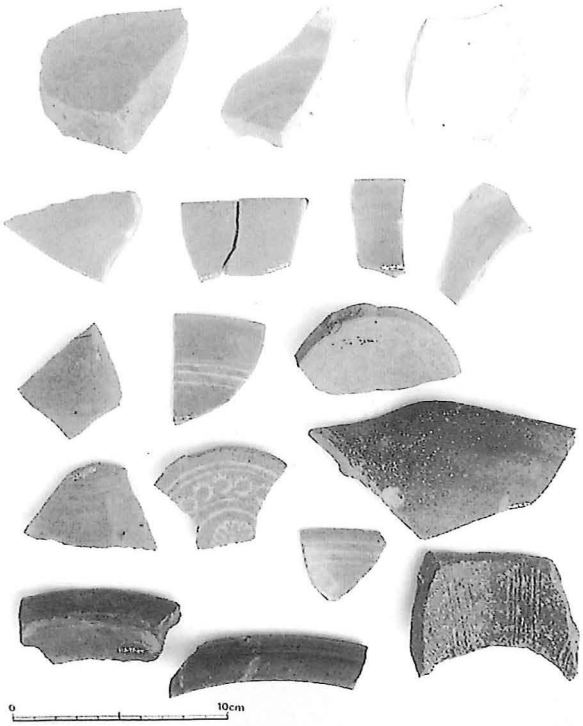
遺物1～13（表）



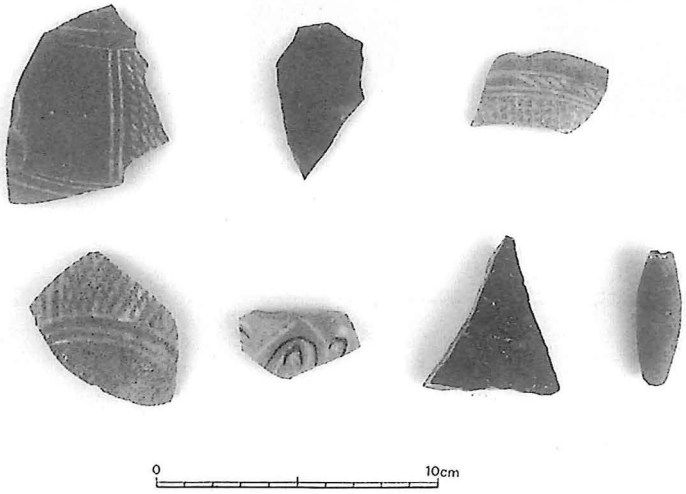
同（裏）



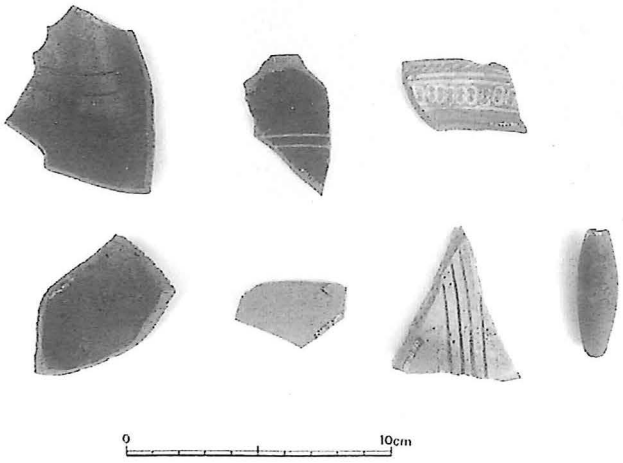
遺物14～30（表）



遺物14～30（裏）

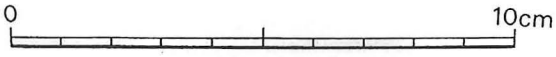


遺物31～37（表）

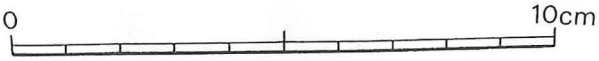


同（裏）

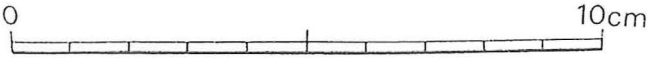
図版６



遺物38



遺物39（表）



同（裏）

報告書抄録

ふりがな	けんないしゅよういせきないようかくにんちょうさほうこくしょ
書名	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅵ
副書名	
巻次	Ⅵ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第172集
編著者名	本田秀樹・川口洋平
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570　長崎県長崎市江戸町2番13号　TEL095－824－1111
発行年月日	西暦2003年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
オテカタ遺跡（いせき）	下県郡厳原町大字豆酘字東保床（しもあがたぐんいづはらちょうおおあざつつあざひがしほとこ）	42441	002	34°07′07″	129°11′09″	20010910～20010928	122	主要遺跡内容確認調査
水崎(仮宿)遺跡（みずさきかりやどいせき）	下県郡美津島町大字仮宿（しもあがたぐんみつしまちょうおおあざかりやど）	42442	001	34°18′47″	129°13′47″	20011210～20011219	69	〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
オテカタ遺跡	包含地	弥生・古墳	不明遺構・ピット	弥生土器・土師器須恵器・陶質土器	住居跡の遺構か？
水崎(仮宿)遺跡	包含地	中世	ピット	貿易陶磁	

長崎県文化財調査報告書　第172集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅵ

平成15年3月31日

発　行　長崎県教育委員会
〒850－8570
長崎県長崎市江戸町2番13号
TEL 095－824－1111

印　刷　㈱クイックプリント
〒850－0034
長崎県長崎市樺島町8番12号
TEL 095－827－1318